
竜の紡ぎ歌

はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の紡ぎ歌

【Nコード】

N82330

【作者名】

はるか

【あらすじ】

この世界には竜の加護を持つ二つの大国がある。一つは竜の知と技を受け継いだアルスメリア王国。もう一つは竜の力と体を受け継いだグランディア王国。アルスメリア王国第一王子の筆頭侍女を務めるフィーナ（18）とグランディア王国の放蕩王子セルク（21）の二人が出会った時、時を止めていた世界が動き出す。「お前を国に連れて帰る」そう宣言したセルクに、「自分の気持ち」と「自分の持つ秘密」の狭間で揺れ動くフィーナ。国を巻き込み、世界を巻き込み、二人の物語は紡がれていく……

プロローグ

白いレンガで造られた幅広い大通りは、新月の夜の星明りの中でも細かな光を放ち、決して小さくはない王都の入り口から王城までをいくつものうねりを見せながら長く導いていた。

大通りの両側には民家や店が連なり、昼間は活気ある民の姿が溢れかえる。

今は真夜中。

窓からこぼれる夜更かしの明かりも一切見えなくなった頃。

長い大通りのちょうど真ん中辺りに位置する大広場に、黒いローブを纏う二人の姿があった。

その内の一人が片手を腰に当て、片手を口元で固定する。

大きく息を吸い、

「や
っほブッ!!」

勢い良く叫んだ声は容赦なく遮断された…。

「何してるんですか！あなたは!!」

こちらは怒鳴りつけてはいるものの、小声。

片手には紙束を丸めたものを握り締めている。深夜の騒音を発した人物の頭をスパーンといい音で鳴らせるだけの厚みはあったようだ。

「何って…王国の皆様は深夜の挨拶をしよう」と…」

「国民を叩き起こすおつもりですか！？そもそも深夜とはいえお忍びで街に来ているのですから、余計な騒ぎは起こさないで下さい！」

注意されても反省の色無く、叩かれた頭を擦りながら恨めしそうな目を向けてくる人物に睨みを利かせたまま、丸めた紙束を戻し内容に目を通す。

「明日から行われる花祭り…いつになく気合が入ってますよ。色とりどりの花で作った竜の模型を大通りを通って城まで担ぐのも例年通り行われます。この広場も明日には花で飾られるでしょうね。」

広場を見渡すと花を飾る為の下準備の後があちこちに見られる。お祭り前の高揚を誘う雰囲気は広場を中心として国中に広がっているようだった。

「…おまえは？」

「え？」

問われた意味がわからず書面から視線をあげると、もうその人は恨めしそうな顔はしておらず、口元に笑みを浮かべ優しい瞳でこちらをみていた。

「今年も参加するの？」

「…はい。」

「…そっか。」

そつけない返事をしながら視線を街中に向ける人に、苦笑して声をかける。

「王子。」

毎年申し訳ないとは思いますが、今年も花祭りの三日間は、遠慮なく楽しませていただきますね。土産話とお菓子は忘れずに持って帰りますから。」

にっこりと満面の笑顔で言うと、王子と呼ばれた方はしょうがない奴とばかりに軽く肩をすくませて。

「しかたないな！マーゼラの木苺パイを買ってくるなら三日間位、侍女の暇つぶしに目をつぶろうかな。」

「寛大なお心に感謝いたします、王子。」腕組をして尊大に言う王子にかしこまって返事をする、二人は夜闇に響かない程度に笑い声をあげた。

「……ところで、今は二人きりだぞ？」

「……それが何か？」

「……『王子』？」

「……『ーあ！』」

「最近また『王子』が染み付いてきちゃったみたいだなあ」

「……そうみたい、ですね。……だね。」

「寂しいよなあ……」

「……ごめん。」

顔を背けて完璧に拗ねモードに入る王子のローブを指先でつまんで謝ってみる。

幾度か軽く引つ張っても返事無し。

「…明日も早いし、こっそり抜け出したのばれたら怒られちゃう。そろそろ帰ろっ？」

ルーシエ。」

そう呼ぶとパツと音がする勢いでこちらを向いて、ニンマリと笑った。

「ばれたら侍女の悪い誘惑に引っかけられましたって言ってやるう。」言いながら大股で王城の方へと歩いていく。

「っな！人を真夜中に叩き起こしておいて！！」まだローブを掴んだままだった為、引つ張られる形で小走りについて行く。

二人が向かう先では白を基調とした白亜の王城が、次の朝日が昇るのを静かに待っていた。

あるいは二人の、二人だけの時間の終焉を、見届けていたのかもしない。

もつすぐ夜が明ける。

花祭りの始まりと共に

世界の歴史もまた大きく紡がれようとしていた。

第一話 花祭り一日目

春も半ば。

様々な花や緑が美しく咲き乱れる季節に、ここアルスメリア王国では毎年大きなお祭りがある。

”竜の花祭り”と呼ばれ、国中が色とりどりの花で飾られ芳香な香りが楽しめる。

三日間にわたって行われる祭りのメインイベントは最終三日目にあり、花だけで形作られた巨大な竜の模型を大通りを通り城に向かって練り歩くのである。

竜の木枠に花を飾りつけるのは国の人々。願いを込め、祈りを捧げつつ一本ずつ差し込まれていく。二日間かけて製作されるそれは観光客や旅人など国外の者でも参加可能な為、大量の花の準備や人の対応に人手が足らず、毎年城の侍女までもが借り出される。

わたし、フィーナ・アルベルト（18）もその一人。

一応、アルスメリア王国第一王子の筆頭侍女を務めている立場であるから、人手不足だからといって借り出されるような身分ではないのだけれど、毎年自らお願いして手伝わせてもらっている。

街の大神殿で寝泊りして三日間も街に居続けが出来る至福の時間は、お手伝いとはいえ身分を自分から明かさない限り町の人たちは只の街娘として接してくれるから思う存分羽を伸ばせるし、王子の

お守り…もといお世話をしなくてもいいし、というわけで竜神がわたしにくれたご褒美なのだと言慮なく楽しんでいる。

その間王子はどうなるのかというと…

第一王子であるルカシエーラ王子は城の中にある竜の神殿の祭壇に三日間祈りを捧げ続けるという大事なお役目がある為、お祭りには不参加。

その間、主が不在なわたしは街でお祭りに参加して国民とのふれあいを楽しんでいるのだ。

そしてお祭り一日目の朝。

王様と王妃様にルカシエーラ王子の神殿入りのご報告と、私自身の外出の許可を頂く為に謁見の間に来ていた。

報告が終わり出て行こうと背を向けた時、不意に王妃様に呼び止められた。

「そうそう、言い忘れていたわ。グランディア国の王子がこの国に来られるそうなの。もしお会いしたら国を案内してあげてねフィーナ。」

「……………え？」

半分振り返った状態で固まってしまった。

グランディアの王子？初耳だ。

「サウラよ、本当か？誰に聞いたのだ？」

サウラ王妃の隣に座っていたハザール王も初耳だったようで驚いた様子で聞いている。

「ルカシエーラから昨日聞いたのですよ陛下。手紙が届いて、花祭りに遊びに来ると書いてあったと。…その様子では何も聞かされていなかったようね？」

後半は苦笑交じりにわたしに向けられたものだ。

急いでここ数日の王子との会話を思い出して見るが、そのような会話をした記憶はない。

本来であれば王子が不在中は筆頭侍女であるわたしが、他国の王子殿下のお世話を言い付かってもおかしくない位の事である。何で神殿にこもる前に言ってくれないのよ！？と焦りと同時に微かな怒りが湧き上がったも許して欲しい。

「……申し訳ありません。初めて耳にいたしました。グランディア国の王子殿下……どなたがいらっしゃるのかお伺いしてよろしいですか？」

たしかグランディア王家には王子が四人いたはず。

直接お会いしたことがないので顔はわからないけど、どなたが来

るのか名前だけでも知っておきたい。

すると王妃はおもむろに豊満な胸を支えるドレスの胸元から一枚の紙を取り出した。

ど、…どこにいれてるんですか王妃様！！

わたしだけではなく、隣の王様もぎょつとして顔を赤くしていた。

というか、王様は胸元見たまま生唾飲んでる？

ちよつと王様！いい加減目を離してくださいよ！

若干身を乗り出し気味に見ている王様に何故かこちらが焦り始めるど、

「陛下…、夜までおあずけですよ？」

紅い口紅を塗った艶やかな口元に笑みをのせて王様を流し見る。

直接笑みを向けられていない私も思わず固まってしまつその強烈な流し目と言葉に、王様は「うむ」と一言うなずいて反対を向いてしまった。

口元を手で隠してはいるが、夜への妄想をかき立てられてニヤついていることは明白だろう。

エロオヤジめ…！！

失礼を承知で自分の主でもある王様を白い目で見てみると、紙の内容を王妃が読み上げ始めた。

「えーっと、『グランディア王家の中でも、眉目秀麗、頭脳明晰、武術にも優れ、真面目で誠実、穏やかな中にも熱い情熱を持ち、大人な色気と魅力も兼ね備え、民からの信頼も厚い』……………王子様がいらっしやるそうよ。楽しみね！」

そんな王子様がいるなんて聞いたことがないような……………？

「……………お名前は？」

「知らないわ」

「え？」

「私もルカシエーラに聞いたのだけれど、こういう方が来るから楽しみにしていると聞いて教えてくれなかったのよ。でも本当にこのような王子様だったら一目でわかるわね。フィーナ、頑張ってみつけてらっしやいな！」

目をキラキラと輝かせて言う王妃様は本当に楽しそうで…わたしはぎこちなく笑みを作った。

「王子殿下に会えるかどうかは別として、花祭りを楽しんでいた

だけるよう、精一杯働かせていただきます。お会いすることが出来
ましたら、急ぎご報告いたしましょう。」

改めて胸に右手を当て、深々とお辞儀をする。

「ええ、お願いね。それじゃお祭り、楽しんでらっしゃい。」

「毎年この三日間はルカシェーラもフィーナもいなくなるから寂
しくなるな。身体に気をつけて楽しんでおいで。」

サウラ王妃につづいてハザール王にも温かい言葉をかけて貰って
心の内側が、ぽつと温かくなるのを感じた。この二人の自然な優し
さと温かさがわたしは大好きだ。

顔を上げて、二人の温かい瞳を見つめる。

「では、いってまいります!」

第二話 (王と王妃 side)

フィーナが謁見の間を出て行き重厚な扉の閉まる音が響いて消えた。

無音ともいえる中、先に口を開いたのはハザール王だ。

「……………で？」

ハザール王は五十を過ぎる年齢ではあるが、後ろに撫で付けるように上げられた黒い髪には所々に白髪がみられるだけで、光沢はほとんど衰えてはいない。歳をとっても整った彫りの深い顔立ちの中、目元に微かにあるしわが黒髪同様の漆黒の瞳の輝きをいつそう引き立てていて、今はいたずらっ子のように探るような眼を肘掛に頬杖をつき下から見上げるようにして隣にいる王妃をみていた。

「なんですか？」

王妃は好奇心満載の瞳から隠すようにして、今まで見ていた紙をまた胸元にしまいこんでいる。

サウラ王妃はハザール王よりも二十近く若く、子供を産んでも尚そのナイスバディともいえる肢体は健在していた。昔から妖艶な雰囲気を持つていた人だったが、歳をとるにつれ誘惑する色気は増しているようだ。金に近い色をした細く長い髪と白い肌を引き立てるような気品ある真つ赤なドレスは胸元が大きく広がる形をしていて、深い谷間が王の欲望を刺激する。

「つきやあ！……！」

突然王が手を伸ばしてきて、胸元に手を入れてきた！

「なにっ……を！……っああ！……やつやめて下さ……あ……やあ……！」

まさぐる手から逃れようと前かがみになり手を引き抜こうとする

が、触れられた場所から発生するほのかな快感が抵抗する力を削いでしまう。

ここは謁見の間。今は二人きりとはいえこんなところで女の声を出すのは恥ずかしくて堪らない！

顔を羞恥や怒りで真っ赤にして王妃は拳に力を溜めた。

「……………やっ…やめて下さい！！！！」

「おっと！」

王妃の放った強烈なアッパーを、王は紙一重でかわした。手には先ほど王妃が胸元に入れた紙を持っていて器用に片手で開き見ていた。

「あっ！」

「なんだ、やはり先ほどのような内容は何も書かれていないではないか。よくもまあ、スラスラと嘘を読み上げられるものだな。それとも……………」

紙を持っているほうの手とは反対の手で王妃の髪を一房とって口付け、王妃をじっと見つめる。

「目の前の理想の男を、自慢せずにはいらなかったのか…？」

瞳の奥に熱い光を灯して、柔らかく、けれども誘うように向けられる視線と台詞に王妃は更に真っ赤になって「バカね」と顔を背けてしまう。この人は結婚した時、いや結婚する前からこうだ。二十近くも年上で大人な王子様は私と結婚できなければ王位を継がないとまで言ってしまうほどの情熱を、今も変わらず注ぎ続けてくれている。

女としても恋人としても妻としても王妃としても、向けられる愛情に不満を持ったことはないけれど、時と場所を考慮してくれないのも昔から変わってはいなかった…。

「セルク・フロルデ・グランディア。たしかグランディア国の第

四王子だな。確か視察と称して各国を旅することが多い放蕩王子…と、聞いたことがある。」

紙に書かれていたのは一人の王子の名前だけ。

「昨年、ルカシエーラがグランディア国に一年留学していた時に仲良くなったそうです。歳も一番近い王子だから気が合つのですね。放蕩王子と呼ばれるだけあって、興味も多方面、知識も豊富な方だと聞いています。ぶっきらぼうなところはあるけれど、優しく、真つ直ぐな強さを持ったいい奴だ！とも言っていました。」

だから…と王妃は言葉を濁した。

しばらく待っても続きを言わない王妃に王は優しく笑ってこう続けた。

「だから…、娘に会わせなかったのだろうか？」

王妃は無言で自分の手を見つめている。

王妃の胸の中には、もしも…、もしかして…という想いが渦巻いていた。

もしも…娘を大きな心で受け入れてくれる方だったなら。

もしかして…娘を連れ出してくれるかもしれない方だったなら。

娘を。

フィーナを幸せにしてくれるた一人になつてくれたなら。

これほど嬉しいことはないのに…と、母親として強く思わずにはいられなかった。

王は手をギュッと握り締め考え込む王妃の肩を引き寄せて抱きしめると、なだめるように背中をぽんぽんと軽く叩いた。

「こればかりは二人の相性もあるしな。良い王子がフィーナにとつての良い男になるとも限らないだろう？侍女をしているフィーナも凜々しく可愛く幸せそうだとは思うが、王女として育ててあげ

られなかった分、今以上に幸せになる手助けをしてあげようではないか。ルカシエーラも兄としてそう思っているだろうし、弟王子のウィルナートも今は幼く、現状を理解してはいないかもしれないが姉の幸せを祈っているよ。」

静かに王の胸に頭を預け聞いていた王妃も、王の優しく温かい言葉と手のぬくもりに波立っていた心が落ち着いていくのを感じていた。何を焦っていたのだろう。漠然とした不安感にとりこまれていた心はいつも王の言葉で癒される。

この方との娘ですもの。

あの子は必ず幸せになれる。

その幸せの一抹の希望にあの王子がなってくれたらと……ささやかな希望だけが胸に残っていた。

第三話 幼馴染の二人

王との謁見を終えて廊下を歩きながら、フィーナは知らず溜息を零した。

（まったく…。仲が良いのも考えものだわ。）

アルスメリア国の王と王妃が仲が良いということは、國中暗黙の了解となっている。とはいえ、臣下の前でもイチャイチャするのはどうだろう。羨ましいと思うことも多々あるが、最低限場所をわきまえて欲しいと思っているのはぜったいに私だけではないはず。

「まあ、両親が仲が良いということは、喜ばしい事なんでしょうけどね。」

あの二人が実は自分の実の両親でもあると思うと、抱く感情も色々複雑で…ついつい苦笑気味に呟きが零れてしまった。

はっ！として口を手で押さえ、右左と周りを見渡してホッとす。

私がアルスメリア国現国王夫妻の実の娘であり、正当な王家の血をひく王女である事は王と王妃、そして兄王子のルカシエーラと弟王子のウィルナート、そしてサウラ王妃の兄である叔父上しか知らない。

当事者の私でも、よく今まで隠し通してこられたものだと関心通り越してあきれてしまう。

ある事情の為、幼い頃から王女として育てることは出来ないと教えられてきたけれど、本当に隠す気があるのだろうかと思つた。幼心にも疑問に思つほどあの両親は愛情を注ぎまくってくれたと思う。侍女として働き出してから「私達を本当の親として慕ってちょうだいね」という対外的な名目を背に、やはり愛情を注ぎまくってくれた。

おかげで特殊な環境で育ったにも関わらず、両親を憎むという発想も微塵もなく今に至る。

これはこれで平和だし楽しいし……両親のラブラブがあつてこそなのかしら……と改めて先ほどの両親を思い返していると、前方に見える渡り廊下の方から楽しそうな話し声が聞こえてきた。

「レインとアステルだね。こんな朝早くから何してるんだろ？」

渡り廊下の柱に寄りかかり腕組して話を聞いている方が王宮騎士団近衛隊の一人。

名をレイン・カシュナート。

青みがかつた灰色の短髪に意志の強そうな眉毛と瞳が印象的な精悍な顔立ちをしている。

二十四歳という若さで近衛隊随一の弓の使い手と言われる彼は、感情の見えない無表情と言葉数の少なさから一見冷たそうな印象を与えてしまうのだけど実は面倒見が良かったりする。弓の訓練をしてほしいと頼まれて無表情のまま目を彷徨わせ困りに困り果てた結果しぶしぶ訓練に行く姿をみては、笑いを堪えるのがもう大変なのだ。

そんな彼と対照的に明るくムードメーカー的存在でもあるのが、そばに居る同じく王宮騎士団近衛隊の一人で、

名をアステル・スージー。

長めの茶金髪に深い碧眼が整っている優しい顔立ちと程よく溶け合っていて、黙っていけば大人の魅力溢れる男性で通る。でも彼は無邪気な子供のように全開笑顔の時の方が女性には人気があるらしい。母性本能がとても刺激されるそうで、その笑顔見たさに料理やお菓子を差し入れに来る女性たちが後を絶たない。

基本的に来る者拒まず去る者追わずな彼ではあるけれど、最近お

気に入りの侍女がいることを私は知っている。

レインと同年で幼馴染でもあるこの二人は良き友、良きライバル関係。

私にとつては暇な時に弓と剣を教えてくれる先生でもあり、兄のような存在でもあり、友でもある。

そんな二人に朝から会えて、街に行く前に会うことができ良かったと思いつつながら近づいていくと二人もこちらに気づいたよう度手を上げて話しかけてくれた。

「おつ！おはよう、フィーナ。今日天気良くて良かったな！」

「おはよう。…大丈夫か？目の下にクマが出来てるみたいだけど？」

「えっ！！？」

アステルにおはようと返す前に、レインに言われた台詞で目元を押さえて固まってしまった。

うそっ！やつぱり昨日夜更かしたせいかな！？

焦る私を見ていたアステルが笑い出した。

「っはは！嘘だよ。クマなんて出来てない。」

「えっ！ホントに？確かに昨日あんまり寝てないんだけど…」

心当たりがありすぎて一概に嘘だと信じきれない私はあまり二人に顔を見せたくなくて自然俯いてしまう。

「じゃあ、ちゃんと顔見せたら。」

レインの声が聞こえたと思つたら、目元を押さえていた両手を横から伸びてきたレインの右手で軽く下ろされた。

え？と思う間もなく「そうだな。」という声と共に正面から伸びてきた手の指が顎にかかり顔を上げさせられる。

(?!?!?)

開けた視界にはアステルの顔のドアップ！

私よりも遥かに高い身長が生み出すほの暗い影の中、朝日を浴びて金色に光る髪と青い瞳が目には焼きつく。見慣れているはずの顔で

もこの至近距離は嫌でも男を感じさせて心臓に悪い。

でもこの二人に対して今更女として男性を意識していると悟られるのも何故か恥ずかしいと感じてしまい、動揺して高鳴る鼓動が吐息からばれないように慎重に言葉を紡いだ。

「……………かな？」

顔は上を向いたまま、視線は顎から目元に上がってくる指の軌跡を追っていた。

そのまま流れるように瞼に触れようとした指に反射的に目を閉じてしまう。

閉じて鋭くなった感覚の中、一瞬ぴくりとアステルの指が緊張したのを感じた。

どうしたんだろうと目を開けようとするのと、後ろから涼やかな声が聞こえたのは同時だった。

第四話 司祭様と黒いステッキ

いや、涼やかな声というよりはむしろ冷たい氷のような…。

「おはようございます。アステル・スージー。まだ寝起きで目が覚めていないのではないですか？頭の風通しをよくしてさしあげましょうか…？」

男性の声にしては高めのよく通る声と同時に目を開けてみると、先ほどまで目の前にあったアステルの顔は黒い棒のようなもので押し離されていた。

「お、おはようございます、サージユ様っ…！！」
首に力を入れながらも返事をしたアステルの顔は朝の光の中でも若干青ざめていて、先ほどまでの綺麗な笑顔も引きつっている。私の目元に触れようとした手も今は宙に浮いていた。

黒い棒が押し付けられている額をつわあゝ痛そうと思いつながら見ていると、冷やかな気配を身に纏った背後の人物に声をかけられた。

「おはようございます、フィーナ。朝から寝ぼけている人に絡まれるとはあなたも災難でしたね。」

（寝ぼけてる人に決定ですか！？）

「お、おはようございます。サージユ様。アステル様には寝不足の顔を心配されていただけで、絡まれていたわけではありませんから。ご心配なく！」

慌てて振り向いて挨拶をする。ついでに何やら誤解を招いているようなので、軽くフオローをいれてみたんだけど、その手にある彼ご愛用のステッキの先端は未だにアステルの額にぐぐぐと押し付けられたまま。

「そうなのですか？それにしても女性の顔をまじまじと至近距離で見るなど、失礼極まりない行為ではありませんか？特にあなたの顔はとても愛らしい…。変な気を起こさないとともに限らないでしょう。」

私の目を覗き込みながら語る彼の肩から、腰近くまであるストリートの銀髪がさらさらと零れ落ちる

細い飾りフレームの丸眼鏡をかけた理知的な顔立ちの彼は、名をサージュ・アングレットとって、この城にある竜の神殿の司祭の一人であり、王子達の教育係でもある。

昔はここにいる私達三人にも勉強を教えてくれていた。

先生とはいえ三十を少し超えたばかりで、見た目は脅威の二十歳前半をキープ。年齢を知らなければレインやアステルと同年と思われることも頻繁にある。

いつもは冷静で穏やかなサージュ様だけど、たまに、顔はにっこり笑顔で凍てつくような空気を出す事があった。

そんな時は機嫌が悪いのか、怒っている時だと思って、私がフオローに入ることもしばしばあるけど、よくアステルに「フオローになつてない!!!」と怒られる。

今もさりげなくアステルを庇ってみた、つもりなんだけど…。

サージユ様のステッキを持つ手に更に回転が加えられているのを私は横目に見てしまった。後ろから小さく「いだだっ！、熱っ！！」という声が聞こえてきて、思わず自分の額を押さえなくなった。

今回もフォロー失敗なのかしら？

アステルが寝ぼけているように見えたから怒ってたんじゃないかと思ったんだけど、違ったのかな…？

顔が愛らしいとかいつも女性が喜びそうなことをスマートにさりげなく言うことが出来るのはサージユ様だから出来ることであって、そもそもアステルが私のことを愛らしいとか思っているはずがないし。

付き合いが長すぎて男とか女とかいう境界線も曖昧な私たちの関係上、変な気を起こすとかあるはずないじゃない。

まあ…たまにはさつきみたいにドキドキすることもあるけど、他人の顔があんな近くにあってドキドキしないわけないでしょ！？

じゃあ、サージユ様は機嫌が悪いだけなのかな…？

今もアステルの額をステッキでグリグリしているサージユ様の顔を伺いながらそう考えていると、事の発端のくせに一部始終を傍観していたレインが横から会話に入ってきた。

そう、元はといえばクマの話題を出してきたのはこの人だった…。

「おはようございます、サージユ様。何か、ご用事があったので

「はいのですか？」

沈黙を守っていたレインが、サージユ様のステッキを持つ手とは反対の手に持つ箱を指差しながら話に加わってきた。

そこでやっと本来の目的を思い出したサージユ様が「ああ、そうでした」とステッキを下ろしてくれた。

そつと横目で見ると、アステルは額を押さえてしゃがみこんでいる。

せつかくの綺麗な顔なのに…同情を横目で投げかけているとサージユ様が話しかけてきた。

「これをフィーナに持ってきたのですよ。」
差し出されたものを見てフィーナはあつと声を上げる。

「わざわざ持ってきてくれたのですか？出発前には取りに伺おうと思ってましたのに。」

受け取った木箱は外見こそ何の変哲もない普通の箱だけど、変わっているのが蓋の部分。

鍵穴が左右に二つずつ計四つあって、いかにも大事なものを入れてそう。

「私が一刻も早くあなたに会いたくて来てしまったただけですから、気にすることはないですよ。」

「そ、そうですか。ありがとうございます。」

冗談なのか本気なのかの理由はともかく、これ以上ご機嫌を損ねないよう笑顔でお礼を言っておこう。

するとサージユ様は上から下までゆっくりと眺めるとご満悦とばかりに笑顔になった。

「今年は桃色のワンピースにしたのですか？あなたの柔らかい子馬のような栗毛色の髪にとてもよく合っています。せっかくのお祭りなので少し化粧を試してみたいかがですか？そのままでも黒曜石のような瞳と朝露をまとったような艶のある唇が可愛い顔立ちを引き立てていますよ、また違う雰囲気をお祭りで楽しむのも気分転換になるとおもいますよ。よろしければ、………私があるあなたを大人の女性にしてさしあげますが…？」

「お、大人の女性って……！??」

最後の言葉だけでも近い距離から色気ある上目遣いで言われた私は、その言葉に軽くショックを受けて思わずその意味をききかえしてしまった。

だって十八歳にもなって、桃色とか…化粧してないとか…可愛らしいとか…。総合すると子供っぽすぎると言われた気がして…。

先ほど、サウラ王妃というナイスバディな大人の女性を見てきたばかりなのにいつもは気にならない言い回しにとても引っかけた。

そんな慌てる私を見て一瞬目を見開いたと思ったら、とても優しく甘く蕩けるように微笑まれてしまい更に不安に駆られた。

私の反応が子供っぽくてかわいいとか思われてたら逆効果もいところじゃない。

サージユ様からすれば私は妹感覚でしか見られていなくて、何をしてもどんな格好をしていても可愛いという感想しか出てこないのかもしれないけれど、ほか一般的な目からみても子供っぽすぎるという感想しか出てこないのは胸に痛い…。

街に出て大人になったねー！とか、綺麗になったねー！とかいう感想を頂けると勝手に期待しちゃってるのもどうかと思うけれど、ほとんどを城で過ごしていて自分の変化を鏡の中の自分でしか推し量ることが出来ない今、城の外の反応や会話も楽しみの一つなのに！！

大人の女性：オススメの化粧とか洋服とかあるのかな…。
教えて欲しい…かも！

一瞬で考えに考えて強張っていた顔に気合を入れながら、渡された箱を持つ手に力を入れた。

「サージュ様！！私を大人のじょっ…っんん！」

「……………用事がお済であれば、神殿にお戻りになられたらいかがですか？」

朝会った時の明るく元気の出るような声とは正反対の、微かな怒りと焦りが含まれた低く威圧するようなアステルの声が頭のすぐ上から響くように聞こえてきた。

私はというと彼の手で口を塞がれた直後、後頭部をアステルの胸に押し付けられてしまっていた。

驚いて口を塞ぐ手をはがそうと思ったのも一瞬で、両手に持つ箱を思い出しどうにも出来ないことを知る。

軽く首を振って抵抗を訴えるが、絶妙な力加減で押さえられていて放してくれる気配はない。

「俺達はフィーナを第一神殿に送るよう王様に命じられています。

戯れはこの辺で終わらせていただきますよ。」

「……………」
再度傍観を決め込んでいたレインも、アステルの言葉に続いて一歩前に進み出てくる。

(な……なに?)

私の目の前にいるサージユ様を二人が無言で睨んでいるのを感じる。

でもそんな時間も一瞬で、軽く溜息をついたサージユ様は綺麗な笑みを浮かべて姿勢を正した。

「そうですか。それは長く引き止めてしまい申し訳なかったですね。フィーナ、気をつけて行ってきなさい。食べすぎには注意するのですよ。」

まだ口を塞がれた状態の為、首を縦に動かして返事をする。
食べすぎて…やっぱり子供扱いの気がする…。

「レインとアステルも気をつけるのですよ。最近人攫いの事件が起こったと報告が来ていました。すぐに犯人は捕まったそうですが、同じ事を考える不届き者が増える可能性があります。フィーナを送り届けたあと、街の様子にも警戒を怠らないように。」

二人がうなずいたのを確認すると「ではね。」と言って来た道と反対側に歩いていった。

姿が見えなくなつてからやっと私はアステルから解放される。
強く押さえつけられていたのは最初だけで、途中からは息苦しくはなかつたけれど口を塞がれたせいで聞きたいことを聞けなかつた不

満は残っていた。

「ちょっと！なんで止めるのよ！せつかくサージユ様に大人の女性の秘訣を聞こうと思ったのに！」

憤慨して叫びながら振り返ると二人はうなだれて深く溜息を吐いていた。

「なによつ。どうせお前が大人の女性？とか思ってるんでしょ。」

「そうじゃない。」

「そうそう。俺もフィーナが大人の女性らしくなることは大賛成なんだけどな。あの人に教わるのはやめておけ。」

レインに続いてアステルもなだめる様に言ってくるが、意味がわからない。

二人よりも大人なサージユ様の方がいろいろ知ってて勉強にもなるじゃないの。

納得のいかない顔をしているとレインがボソツと呟いた。

「……………食われるぞ。」

「はっ？」

「だな。」

「何が!？」

二人で何を納得してるのよ!？

意味がわからず問い詰めようとした私の手から箱をとりあげて歩き出すアステルに続いて、レインも私を置いて歩き出した。

「ちよっと待ってよ！意味がわからないってば。」

「あれだな、お前はもう少し警戒心を持って。」とはアステル。

「見てるこっちの心臓に悪い…。」とはレイン。

歩みを止めないまま好き勝手言う二人に、頭の中でプチンと音が聞こえた気がした。

「……なんなのよっ二人して。いいわよ！街で大人の魅力身につけてきてやるんだからっ！！」

声高らかに渡り廊下から望む青空に向かって叫ぶと、どこからか鳥が一斉に羽ばたく音がした。

こうして祭りを楽しむという目標の他に、魅力UPの目標を掲げて花祭り一日はスタートしたのだった。

第五話 朝の襲撃

朝日も昇りきり青い空を真っ白い雲がゆったりと流れていく様を、馬車の中から窓を開けてのんびりと見上げる。

城から街までは少し距離があけていて、その間様々な花が点々と咲く原っぱが一面広がっていて景色もとてもどか。

景色を楽しみながら春風をめいっばい吸い込んでいたらお腹がすいてきて、自然と話題も食べ物へ。

「ねえ、レインはマーゼラおばさんの木苺パイ買いに行く？たしかレインも好きだったよね。」

この国では甘いものが名物の一つにもなっていて、基本的に一人一ホール買って帰ることが日常風景。

数あるお菓子屋さんの中でも有名なのがマーゼラおばさんが開いているフルーツパイの店で、冬に実る不思議な木苺を使った花祭り限定の木苺パイは毎年の楽しみの一つにもなっている。

私の質問にもレインはしばらく腕を組んで外の景色を眺めていたけど、やっと軽く小首を傾げながら振り向いてくれた。

朝も早く起床、ぼかぼか陽気、心地の良い馬車の揺れ。

王宮騎士団の中でも近衛隊は国中から羨望の眼差しを向けられる人気のある役職だ。アステルやレインは若いけれど実力が認められるの近衛隊入隊で、二人とも顔も綺麗だから街の女性達からも人気がある。けどその綺麗な顔も今は崩れまくっている。

(眠いのはわかるけど綺麗な顔が台無しだよレイン…。)

いや、意外とこの無防備そうな顔が乙女心をくすぐるのかも…でもなあ…。

心の中でもつたいたいと思っていると、明らかに眠気眼のレインがしばらくの沈黙を破って発言した。

「……………好きだけどーホールは、いら
ない。一人では食べきれないから。」

「ええー！？あんなに美味しいもの私なら一人でペロツといけち
やうよ！？人生損してるよ！」

一つといわず二つでもいける！

あの生地の上っとりな食感と中のクリームのとろける様な甘さを、
上の木苺の甘酸っぱさが一まとめにしてくれていて食べても食べて
も飽きがこない！

毎日でも食べていたのに花祭りの期間中しか食べられないのが
心の底から恨めしいのに！！

信じられない！とばかりに人生にケチまでつけられたレインは寝
ぼけ眼をさらに細めてじーっと見てきた。

「な…なに？」

「太るぞ。」

「ぐっ！ちゃんと働いて運動して遊んで消費します！大丈夫！」
密かに心配していたことをズバツと言われて怯んだけれど、そこは
意地でも反論する。

そーよ、動けば大丈夫なんだから。

（とか言って毎年お祭りのあとに体重増えて焦ってるのも毎年のこ
となんだけど…）

何となくレインの視線が気まわずくて外に向かって自分に言い訳を
ぶつぶつ言っていると、肩の辺りで風がふわりと動いた。

「…大丈夫…。」

振り向くとレインが身体の位置はそのまま片手を伸ばして私の髪
に触れていた。

「フィーナが好きなだけ食べるといい。太っても俺は気にしない
…。」

言いながらも私の髪を手でもて遊んでいる。

優しい目をして壊れ物にでも触れるような手つきが妙にくすぐったく、恥ずかしい。

「レインが気にしなくっても私は気にするんだけどね……。でも、ありがとう」

肩をすくめて笑顔でかえすとレインも微笑み返してくれた。

毎年体重を気にしていることも長い付き合いから知ってるから、周りの目を気にせず好きに食べられるように言ってくれたんだと思う。

普段無表情で言葉も少ないレインだけど、たまに見せる笑顔と裏表のない正直な言葉にとても癒される。

二人でニコニコ笑顔を交し合っていると…

「…楽しそうだな、お二人さん。」

「え？」

レインとは反対側の開けた窓の外を見ると、アステルが羨ましそうに中を覗いていた。

アステルは馬に乗っているので、馬車の窓の高さと同じくらいの高さで会話が出る。

「レイン、フィーナに触るな。話すな。微笑むな。そして俺と代われ。」

「嫌だ。」レイン即答。

今乗っている馬車は四、五人は乗れる大きさなんだけど、乗っているのは私とレインの二人だけ。

アステルも本当なら一緒に乗るはずだったんだけど…。

「あー…ごめんねアステル。私もまさかこんなに荷物増えちゃうとは思ってなくて。でもこれでも必要最低限に絞ったつもりなんだよ。」

「これでかよ。」

そう、馬車に乗る私とレインの前の席には巨大な袋が何個も積み
さっていた。

三日間を過ごす為の身の回りのもの一式。
他に城にいる人たちから街の人たちへ渡して欲しいと頼まれたもの
など色々入ってる。

荷物のせいで座る席が足りなくなり、しかたなくアステルとレイ
ン二人のうちどちらかが馬に乗ることになったんだけど、コインの
裏表当てでアステルが負けてしまった…。

今も馬車の中と外でにらみ合う二人。

そしてレインの手はまだ私の髪に触れたまま。

「あーあ、俺もフィーナと馬車の中が良かったなー。レイン！触
るなっつての！」

「フィーナの髪はさわり心地がいい…。」

「フィーナ！お前も嫌がれ！」

「え…別に嫌じゃないし。アステルだってたまに触ってくるじゃ
ない。自分はいいのにレインは触っちゃダメなんて、子供じゃない
んだから。」

たしなめるように言う私の横でレインが吹き出して肩を震わせ笑い
だした。

なに！？と思って見てみると外のアステルからも重く長い溜息が
聞こえてきた。

「ほんとにお前はもう…。」と首を左右に振りながら呆れかえってい
る。

なんか今日このパターン多くない!?

「もう！また二人してバカにしてるでしょ！？手作りのクッキー
二人にはあげないからね！」

「クッキー？」

「フィーナが作ったのか？」

このレインの台詞には作れるのかという響きが込められていたような気がしたけどあえて無視。

「そうよ。今日から頑張ってくれる珠巫女さん達たまみこにあげようと思っただくさん作ったの。」

言いながら目の前の荷物の一つを開けて中のものを取り出して見せる。

小さな袋にクッキーが3、4枚入ってるだけなんだけど、二日間かけて仕事の合間に頑張って作った努力の結晶。

「へー、この袋の中ぜんぶクッキー？…頑張ったな。」
レインが感心そうに覗いてくる。

「でも二人にはあげませんから。残念でした。」
「そんなこと言うなよ。俺達も警護で頑張るんだぞ？」

アステルに続いてレインも「そうそう」と便乗してくる。

「先に機嫌そこねるような事言ったのはそつちでしょう？…でも、まあ、無事に竜の模型が完成して、その時まだクッキーが残ってたらあげてもいいよ。」

膝の上に置いてある箱をそつと撫でる。

この中にはお祭りに欠かせないものが入っていて、これを毎年神殿にもつていくのも私の役目。

毎年頑張ってくれてるし、クッキー喜んでくれるかなあ、珠巫女さん達…

この珠巫女たまみこというのはこのアルスメリア国の血筋にしか生まれないう特殊な能力をもった女の人のこと。なぜか男性でこの力を持つ人が生まれる事はないらしい。

竜の知と技を受け継ぐアルスメリアでは、珠巫女は聖なる竜の力を持つ者として大切にされていて、これから行く第一神殿では竜神に祈りを捧げて人民を助けるというお役目の他に、この珠巫女を教育・保護するというお役目がある。

珠巫女さんの為の学校って感じかな。

強弱の違いはあるけれど、大抵の人が持っている能力なのが治癒能力や再生能力。

人の病や怪我を治したり、壊れたものを力で修復したり。

完璧に力を制御できている人は稀らしいけれど、そういう人達はほとんどが第一神殿の巫女教育を卒業した人たちだ。

そして力を持った珠巫女は人買いの標的にもされやすい。

自ら名乗るか、力を示すかしないかぎり珠巫女と判ることはないはずなんだけど、どこから情報が漏れるのか未だに人攫いにあう珠巫女がいる。

そういう事が起こらないように能力を持つ人は保護を目的に第一神殿に集められる事になっていくんだけど、生まれつき能力を持っている人もいれば、ある日突然開花する人もいるらしいので、珠巫女という存在を知らない人は第一神殿に教育・保護してもらえないということも知らない。

現在第一神殿にいる珠巫女たちはきつとほんの一部の女性達なのだろう。

そんな珠巫女さんたちの力を借りて竜の模型が完成する。

今年はどんな竜になるのかな。

楽しみだな。

「…ってことはクッキー貰えるのは早くても三日後ってことか。それも楽しみに仕事頑張るとするかな。」

「ふふ、頑張ってるねアステル。レインも明日も頑張ってるね。」

「…努力する。」

その嫌そうな顔にアステルと二人で笑ってしまった。

結局、一緒の馬車に乗っていようが乗ってしまいが三人でいると楽しく時間が過ぎてしまい、気づけば目の前に町並みが近づいていた。

昨日までと違って花の香りに満たされ、色とりどりの花びらの舞う街中はどこをみても美しい。

まだ早い時間の為、出店の準備に追われる人たちだけがせわしなく動いていた。

第一神殿はこの国で一番大きな神殿で、大通りを通り中央広場を左に曲がり進んだところにある。

曲がるとすぐに神殿に大門が見えるんだけど、その門の大きさがまた半端ない。

三階建ての家がまるごと通れる位の大きさの門がそびえ立っているので、結構遠くからでもわかる。

相変わらず大きな門だな〜と窓から半分顔を出して見ていたら、急に腕を掴まれ中に引っ張られた。

なにっ!?!?と思っただ時にはすでに短剣を抜いたレインが鋭い目を外に向けていた。

馬車もいつのまにか止まっている。
何が起きたのかと声を発しようとしたら片手を挙げて遮られた。

「…囲まれた。」
「え?」

聞き返すと同時にバラバラと数人の足音がして視界にも馬車を取り囲むように男の人たちが立ちはだかっているのが見えた。

その手には剣をもっている。

アステルを探し見ると馬上の彼もゆっくりと長剣を抜いているところだった。

「早朝から元気だねえ。あいにくだけど相手を間違えてるんじゃないのか？この馬車には金目の物も絶世の美女も乗ってないぜ？」

口調も表情も軽いけど発せられる気は鋭く、隙がない。

馬車の中からだとの位の人数で、何をしようとしてるのか良くわからないけれど顔を布で隠し、抜刀する人たちが、まともな理由で困んでいるとは思えなかった。

まだ朝早いこの時間では、大通りでは人も多く賑わっているが一步横道に入ってしまうと薄暗く人も通っていないかった。

男達はアステルの軽口にも無表情に口を開かず、威嚇するばかりで目的も何もわからない。

アステルが馬からゆっくりと下りるとき、馬車の中に居る私達にだけ聞こえるように小声で話しかけてきた。

(馬車の馬が押さえられてる。俺とレインでこいつらを食い止めるからフィーナは全速力で神殿に駆け込め)

神殿は目の前。

馬車の中で二人が敵を倒すのをじっと待って足手まといの状況になるよりも、私を神殿に逃がしたほうが良いと判断してみた。

「…つきゃ！」

アステルの言葉を聞くと同時にまた腕を掴まれて、反対側にあるドアから外に連れ出された。

掴まれている方腕には箱を抱きしめている。

他の荷物はどうなってもこれだけは死守しないと！

外に出ると男たちは一斉にレインに切りかかった！

出来る男レインは弓だけじゃなく、短剣の腕もピカイチ！流れるよ

うな動きで男達の剣や体を私をかばいながらも受け流していく。

馬車の反対側からも剣戟の音が聞こえてくるから、アステルも戦っているんだろう。

馬車を背にして両手で箱をぎゅっと抱きしめて様子を見てみると、レインが想像以上に手強いと感じたのか容易に攻撃してこなくなったのがわかった。

レインもその様子がわかったのか、私のところへきて背を押しながら神殿に向かおうとする。

「今だ。困いを抜けたらフィーナは一人で神殿に走るんだ。出来るな？」

「もちろん！」

逃げようとする私達に気づいて男達がまた襲い掛かってくるが、レインが走る足を止めないまま退けてくれて、男達の困いを抜けた瞬間レインの腕に押されるようにして私は一人神殿へと走った。

後ろから剣戟の音と共に「逃げたぞ！」とか「追え！」とか聞こえてくるけど、怖くて振り返れない。

私を狙ってたの！？なんで！？

それともこの箱…？確かに貴重なものだけど！

心の中でやーだー！と叫びながらも必死に走る。

もう少し…！！

神殿の大門の横にある通用門から中に入ろうとラストスパートをかけた瞬間、けたたましい音と共に目の前に黒い影がよぎった。

「つきやー！！」

ぶつかりそうだったので思わず足を止めたのがいけなかった。

屋根のある一台の荷馬車が目の前を通り過ぎたと思ったら、後ろの荷台から二人のマスクをした男が飛び出してきて荷台に連れ込もうとする。

「やっ…やだー！！放してよっ！！アステル！！レイン！！」

必死で身体をひねって二人の名前を叫んで抵抗するが、箱を抱えているので抵抗にもなっていないかったのかも。

両腕を捕られて荷台に連れ込まれてしまう。

直後、現れたときと同様にすごい勢いで荷馬車は走り出す。

走る爆音に混ざって「フィーナ！」という叫び声が遠くから聞こえた気がした…。

波乱の花祭りかもしれないなあと他人事のように心の中でフィーナは思った。

第六話 荷馬車での攻防

「おーろーしーしーてーしーしー!!!」
叫ぶフィーナを男が二人がかりで押し止めていた。

馬車が走り出した直後に腕に木箱を抱きかかえたまま、馬車から飛び降りようとしたせいだ。

馬車の荷台に乗っていたのは四人の男達。

皆口元に布を巻いていて顔はわからない。

今私を押し止めている二人は、馬車の中に連れ込んだ男達だ。

「つたく、大人しく座つてろ!!!」

「…きやつ!!!」

痺れを切らしたのか一人の男が私を荷馬車の奥に突き飛ばした。女性を突き飛ばすなんて男として最低!と心で叫びながらも、箱を抱えて受身を取れないので背中への衝撃を覚悟して目をつぶる。

だけど、やってきたのはぬくもりのある力強い腕の感触。

え?と想って顔を上げると口元の布の他に頭にバンダナを巻いた男の人が左腕だけで私を抱きとめてくれていた。

(…助けてくれた?)

悪い人たちばかりでもないのかな?と想っていると、

「先輩。一応商品なんで、怪我させない方がいいんじゃないですか?」

(商品!?!?!私の事ですか!?)

信じられない言葉に思わず口を開けて呆けていると、先輩と呼ばれ私を突き飛ばした最低男がまたも最低発言を繰り返した。

「まあ…そいつはオマケみたいなもんだけどな。依頼主に会わせ

るまではその方がいいか。」

(オマケ扱いされた…。朝の子供扱いよりヒドイ…)

「シン。これでも被せて、隅に座らせておけ。」

傍に立って見ていた四人目の男が布袋を投げてきた。

シンと呼ばれた人は私を支えている腕とは反対の手で投げられた布を掴むと無言でうなずいて私に向き直る。

見知らぬ人の居る見知らぬ場所で視覚を塞がれるという状態が恐ろしくて私は荷馬車の奥に後ずさりしながら顔を横に振った。

「嫌。嫌です。……ひゃっ！」

入り口が布で仕切られている為、荷馬車の中は薄暗く足元も見えずらい。

後ずさるうち足元にあった縄につまずいて後ろに転んでしまい、結果的に隅に追い詰められてしまった。

軽く打ちつけたお尻の痛みに気づかない振りをしてまた立ち上がろうとすると、目の前にきらりと光るものが見えた。

シンという人が短剣を抜いて眼前に見せ付けてきたのだ。

「大人しくしてろよ。痛い思いはしたくないだろ？」

さすがに目の前に刃物を見せ付けられて身動きが出来ず、生唾を飲むと同時に頷き返す。

さっきは怪我させないほうがとか言ってたのに…と心の中で文句を言っただけでシンという人を睨みつける。

実際に傷つけるつもりはなくても、刃物というものは存在が傍にあるだけで背筋が震える。

人を脅す道具としてこれほど身近で最適なものはないだろう。

…自分を守る道具でもあるけどね…。

早くこの人たちから逃げて神殿にこの箱を届けなくてはという思いでいっばいの私は、刃物を突きつけられても形勢逆転のチャンスを狙っていた。

アステルやレインに教わって剣の扱いも多少なら出来るし、彼ら

に自分を傷つけるつもりはない。

相手は四人。

馬車は走り続けてはいるけれど、曲がる瞬間とか止まる瞬間とかきつとある。

…反対にこの短剣奪って逃げられないかな…と無謀な考えを一瞬よぎらせたところで変な違和感を感じた。

目の前にある短剣の刃の部分に淡く浮かぶ紋章があったのだ。

(え……なに……?)

光の加減で見えたり見えなかったりするけれど、青紫にほんやりと浮かび上がる紋章に見覚えがあった。

紋章に目を凝らしながら記憶を探っていく。

ついこの間も見た気がする…。

確かルカシエーラ王子に届いた書簡の中にあの紋章があったよう
な。

でも、どこのだったか思い出せない…!

王子が見る書簡は身元が証明されたもの、もしくは親しい友人や親戚からのものがほとんどのはず。私も中身までは見ないけれど、誰から何が何日に送られてきたかはチェックしていて本当に重要なものは内容も見せてもらっている。

考え込んでいる姿を、逃げるのを諦めたと思ったのか目の前から短剣をひいて鞘におさめようとした。

あ。

気づけば、がしっ!と音がつきそうな勢いで剣を持っていた方の腕を掴んでいた。

剣は半分鞘におさまった状態で止まっている。

弾かれた様にこちらを見たその人の目を覗き込むと、驚きと戸惑

いで揺れていた。

見えるのは目元だけだけど、良く見ればそこだけで整った顔立ちの青年だとわかる。

凜とした眉毛に長いまつげ。

深いセピア色をした瞳は暗い馬車の中でも輝きをもってそこにあった。

「……………あなた……………これ……………!!!」

どうしたの。という言葉は腕を軽く振り払われたと同時に頭にかぶせられた布袋によってかき消された。

それでも口を塞がれた訳ではなかったのでそのまま話しかけようとしたのだけど、

「これ以上無駄話をしようとするなら口も塞ぐし腕も縛る。自由の身で座っていたいなら大人しくしてろ。」

それは嫌。

しかたなく箱を抱いて大人しくすることにした。

しばらく私の様子を見ていたらしい彼も近くに座るのを気配で感じる。

彼の様子を肌で意識しながらも先ほどの短剣について考えを巡らせる。

あの紋章。

思い出した。

なぜこの人があの紋章の浮かぶ短剣を持っているんだろう。

貰った？

盗品？

人攫いなんてする人達の仲間だから、それもありえない話じゃない

い。
問いただしたところで持ち主に返すとも思えないし、自分のものだと言われたらもう仕方ないんだけど、気になったら知らずにはいられない。

その事だけに限らずわからないことだらけだ。

男達はなぜ私を誘拐したのか。

依頼主とか言っていたから、この人たちは雇われただけ？

あの最低男は私の事をおまけと言った。

ということは、目的はこの箱かな。

中に入っている物はお金でも金目の物でもない。

金銀財宝が入っていると思ってる盗むのも、何が入っているか知らずに盗むのも、どちらにせよ意味のない行為としか思えない。

これは、これを必要としている人の手に渡ってこそ威力を発揮するものだから。

その為にも早く第一神殿に届けないといけないのに！

そこまで考えて、深く溜息が出た。

アステルとレイン、大丈夫かな…。

心配、してるだろうな。

”おまけ”なら私も一緒に誘拐することなかったじゃない。

あの男の最低発言を思い出してイライラもぶり返す。

一人怒ったり悩んだり悲しんだりして、疲れた。

膝に乗せた箱に腕を乗せて突っ伏すと、こんな状況でも眠気がやってくる。

あの二人が知ったら緊張感が無さ過ぎると怒られるかもしれないな。

怒った顔を思い描いて一人笑った。

でもなぜか、傍にいるシンという青年の存在に安心感を持ってい

る自分がいた。

彼がいれば何もされない。

根拠の無い自信。

その理由を考えるだけの意識はもう無く、助けしてくれた時に彼が触れたぬくもりを思い出しながら眠りに落ちていった。

第七話 夢と現実の狭間で

ふと目を開けるとフィーナは水の上に立っていた。

足元から水の波紋が幾度も広がり、彼方に見える闇に溶ける様に消えていく。

寒くも温かくもなく、音も無く風も無く、自分と水面以外動くものは見当たらない。

どこだろう、ここ。

水の上に立っているというのに不思議と疑問も恐怖も感じない。ただ、見下ろす自分の身体が透けている事が寂しく、切なく思えた。

だれか、いませんか？

果ての見えない空間に向かって問いかけてみたが予想通り返事はなく、もう一度周りを見渡してから足を一歩踏み出してみる。

触れた足裏からはまた新しい波紋がいくつも広がり始めるだけで、身体が沈むわけでも水面が大きく揺らぐわけでもない。

触れているはずの足裏にも水の感触は感じられず、冷たささえももなかった。

どうしようと考えあぐねていると、どこからか神妙だが軽やかな声が聞こえてきた。

「ここに来てはだめよ。」

え？

突如聞こえた女の人の声に辺りを見回すが、誰もいない。

「上よ、上。」

上？

声に従って上を見ると、遙か上空に丸い穴がぼつかりと浮かんでいた。

穴の向こう側が明るいせいで声の主の姿は光に溶けて見えないが、微かに笑い声が聞こえてくるからあそこに誰かいるのは間違いないだろう。

あなたは誰？ここはどこですか？

問われたその人は笑うのをやめて楽しそうな声で答えてくれた。

「私はこの守人。ここは聖なる神域。さしずめあなたは侵入者
つとところかしら。」

大人びた話し方をしているけれど、声の高さはまだ幼い子供のもので違和感を感じずにいられない。

侵入者と呼ばれた事は自覚がないだけに納得がいかないけれど、声の調子からして彼女が怒っていない事がわかる。

ごめんなさい。気づいたらここにいて、どうやって来たのかも出るのかもわからないの。ここから出してもらえませんか？

「……呼ばれたのね。」

え？

「…いいえ。あなたの意思で来たのでないなら、しょうがないです
ね。帰して差し上げます。」

ありがとう！。

ポツリと呟かれた言葉は私の耳には届かなかったけれど、帰して
くれるという言葉でささやかな疑問は吹き飛んでしまった。

誰かわからないけど帰してくれるというのだから悪い人ではない
のかも。

満面の笑みで感謝を言うと、コロコロと鈴の音を鳴らすように軽
やかに笑われてしまった。

どんな子なんだろう。

フィーナの中では可愛らしい、けれど大人びた10歳くらいの女
子のイメージが出来つつあった。

助けてくれるというのだから、何か引き上げてくれる縄を下ろし
てくれるとか他の出入り口を教えてくれるとかを想像していたのだ
けど、上を見上げているフィーナの元にシャボン玉のような半透明
で虹色に輝く小さな球がふわりと降りてきた。

??

その球は重力とは関係なく、操られているように目の前にすつと
降りてくると一気に膨れ上がってフィーナの身体を包み込んでしま
った。

わっ！！

未知なものに包まれて驚いたけど、おそろおそろ手を伸ばして中から球に触れるとすべすべとした感触が伝わってくる。

シャボン玉のように触れたらパチンと壊れてしまっつかと思いきや存外に頑丈なものらしい。

「今はまだ、ここに来る時期ではないの。…時が来たら招待状を送りますね。」

ほのかに球が光りだす。

「また会いましょう。フィーナ。」

なん…!!

で私の名前を知ってるの？と続くはずだった言葉は割れるように弾けた球と同時に宙に消えた。

気づいた時には私の意識は現実に戻っていて、今体験した事の現実味の無さを実感する。

(あれ……………夢?)

行った事のない場所だったけど不思議と懐かしさを感じる場所だった。

あの女の子（女の人？）も私の事知ってるようなこと言ってたし、本当にまた会えたらいいけど…。

思い返しているとだんだん意識がはつきりしてきたので、ゆっくりと目を開けてみる。

視界が塞がれていてもいまだ荷馬車の中にいて、時折雑に揺れる振動から街中を走ってないのだとわかる。

（今どのへんだらう。どのくらい眠ってたのかな。）

そんなに長く眠った気はしないけど実はもう真夜中だったりしたら冷や汗ものだ。

馬車の中の様子だけでも知りたくて、頭に被せられている布袋をそっと取ろうとしたらゆっくりと馬車が止まった。

（どこかに着いた？）

どうやら目的の場所についたらしく、中にいた男達が足音荒く出て行く音がする。

やっと馬車が止まったのは新緑の香りを強く感じるところで、鳥の声も街中より多い気がした。

私も外に出して欲しくて布袋の中できよきよしている、頭に被せられていた布袋がいきなり抜き取られる。

「わっ！」

驚いて見上げた先に布袋を投げ渡してきた四人目の男が立っていた。

呆ける私の膝の上から箱を取り上げると腕を掴まれて乱暴に身を立たされる。

「出る。」

「きゃっ!!」

腕を掴まれたまま引きずられるように馬車の外に出されるが、暗闇に慣れた目に外の光はつらい。

ついでに掴まれた腕も痛い。

女の子なんだからもう少し優しく扱えないの!?

男にムカつきながらも、とりあえず状況を把握しようと周りを見渡す。

やっぱりまだそんなに時間は経っていないみたい。太陽が昇りきっていないし、森の香りにも朝露の匂いが残ってる。

目の前にある大きなお屋敷も森に囲まれてはいるけれど、続く道はある程度整備された道だから街からもそんなに離れてはいないはず。

だからといって歩いて簡単に帰れる距離でもなさそうだけど…。

逃げた場合の逃走方法を考えて溜息がでる。

馬でも奪わなきゃダメかな。

「ほら、歩け!」

止まって考え込んでいた私を歩かせようと男が腕を引く。

(ムカツ)

パンッ!!

我慢も限界で、女性への礼儀知らずな男の手を振り払ってしまった。

男は怒って何かを言おうと口を開いたが、それよりも前に男の目を睨んだまま口元に微笑を浮かべ普段よりも低く冷たい声に怒りを

こめて話す。

「失礼。子供ではないのですから腕を引かれずとも自分で歩けます。それにその箱も私がお持ちしましょう。鍵を四つもかけるほど繊細なものが入っています。あなたが持つていって、万が一依頼主という方が中身の損傷をあなたのせいにしてもお嫌でしょう?」

問われた男は威圧する話し方と、正論を問う内容に口ごもり迷っている。

「道もわからずこんなところに連れて来られて、今更逃げ出そうなんて思ってますから。」

言いながら男の手から箱を取り返す。

そのまま屋敷の入り口へ歩き出すと、男が焦った声を出して追いかけてきた。

考えたところであるようにしかならないし、この人たちの事を知ってから計画を立てよう。

まだ時間はあるみたいだし、アステルやレインもきつと助けに来てくれる。

それまでに情報を手に入れて、出来ることはやっておかなくちゃ。荷馬車の中で軽く睡眠をとって気分がすっきりしたのか、変にやる気に満ちていた。

この時、城のみんなの助けを黙って待つという選択肢はまったく私の中にはなかったのだった。

第八話 正体は…？

屋敷の中に足を踏み入れると正面に途中から左右に分かれる豪華な階段のあるエントランスが広がっていて、上を見上げると三階まで吹き抜けの天井にこれまた大きく豪華なシャンデリアがあった。

先ほど荷馬車の中にいた他の三人は誰かを待つかのように入り口横に控えている。

ついその中にシンという男を探している自分に気づいて苦笑する。彼はこちらに興味がないらしく他の二人のように振り返り見るとも無い。

（あとで時間あつたらあの短剣について聞きたいんだけど、正直に話してくれるかな。）

さっきは縛られなくてあれ以上問いただせなかったけど、絶対に聞き出してやるんだから！

決意を込めて睨みつけた後、次にちらり後ろを振り返ると先ほど私を連れてきた男がなぜか従者のように私の斜め後ろに立っていた。屋敷の中に入るまでも箱を持つ私を気遣ってなのか、先導してドアを開けてくれたりしたし…実は意外とフェミニストなんじゃないかと思っている。

「…もう逃げたりとかしないからお仲間のところに行ったら？」

「……………」

「まあ、いいけど…」

無言を貫く男に軽く息を吐いて、よいしょと箱を持ち直す。

軽く見渡しても絵画や壺、刺繍を凝らした絨毯など豪華な調度品の多い部屋を眺めながら、犯人の人物像に考えを巡らせる。

これだけ大きなお屋敷に調度品の数々。この屋敷の主が雇い主なら貴族の可能性が高いかも。

同時に晩餐会や謁見で会った事、もしくは見たことのある人かも知れない。

この箱が狙いだったらしいけど、だとして自分の顔を知るかもしれない私も一緒に攫うかしら。

でも私を知らないご子息って可能性もある。

王族に謁見できない成金貴族だって沢山いるわけだし。

それにしたって私だったら箱だけ奪って、人はいらぬ。

”おまけ”に連れて来てくれてご苦労様ですけど、私を攫ってただで済むと思っただら大間違いなんだから！そもそも箱の中身が何か知ってるのかしらね！

眼光強く目の前の箱を睨みつけていると、階段を下りてくる足音がしてはっと顔を上げる。

「ああ、これは美しいお嬢さんも一緒に来ていただけたのですね。我が屋敷へようこそ。歓迎いたしますよ。」

大げさな身振り手振りを加えて話す金髪の男と、体格の良い色黒のスキンヘッド男が階段を下りてきた。

艶のある金の髪は肩の上で内巻きにカールされ、長い前髪が目元にかかり表情はよくわからないが話し方の芝居がかった口調に不信感が増す。

やはりどこかの貴族の子息だろうか。声の感じや顔からしてまだ若い。

意外と長身なその人は目の前までくると片手を胸にあて、屈み込んで私の目を覗き込んできた。

「わたくしのことはミランとお呼び下さい。お噂には聞いておりましたが、噂以上の可憐な美しさ…。やはり一国の王子殿下の傍にはそれなりに相応しい侍女が居られるんですね、フィーナ殿。」

（私の事を知ってて攫った？）

誘拐した人たちは私の素性を知らなかったみたいで、部屋の中が微かにざわめく。

「…私が王子付の筆頭侍女であると知っての誘拐ですか？ミラン卿。」

「誘拐とは心外ですね。わたくしの素晴らしい屋敷にあなたをご招待しただけですよ。このエントランスだけでも有名な美術館に引けをとらないと思いませんか？美術品の採集がわたくしの趣味です、世界各国から金を惜しまず手に入れています。」

招待：無理やり荷馬車に連れ込んで剣を突きつけて脅す事のどこが招待…？

冷めた目で男を見据えるが、そんな私の心の突っ込みを無視するかのようにその後もあの絵画はどーだの、壺は何百年前のものだの、この敷物は伝説の動物で作られただの、本当かどうかわからない解説を一つ一つ嬉々として語り始めた。

「そう、私は手に入れたいものには金も努力も惜しみません。必ず手に入れる自信があります！」

自分の演説に満足したのか目を閉じて陶醉しているその様子に嫌悪感が増大する。

それに比例して自分の口元に冷たい笑みが浮かんでいた。

「…そうでしたか。招待の仕方に品位の欠片も見られませんでしたので、てつきり誘拐かと。お迎えにこられた方々もあなたの従者にしては素朴で乱暴な方々ばかり。主の質は従者の質…。どんなにお屋敷の中が煌びやかでも、あなたご自身にはそれなりに相応しいという従者は、おられないようですね。」

最後はにっこりと笑顔で締める。

ミラン卿の笑顔はビシツと引きつり、周りの男達は自分達が素朴で乱暴だと自覚があるのか私を睨んでくることはなかった。それどころか横に控えている三人の男の内一人が笑いを堪えているのが横目に見える。

言いたい事を言っつて少し気分がスッキリ。

心の中でざま〜みろと思っていると、しばらくしてミラン卿が小さく笑い出した。

「ふふ…ふふふ……そうですね。あなたの、言っつとおりです。」
「……？」

挑戦的な笑顔を向けられ、なぜか背筋がヒヤリとした。

「わたくしの今回の目的はその箱の中身です。正直言いますと、フィーナ殿のことは存じ上げてはいましたがご招待する予定ではありませんでした。ただし状況によっては箱を持つ者も一緒に連れて来ても良いと…女性ならば丁重に扱えと指示を出しておりました。」

「予定になかったのであれば、私だけでも帰して頂けませんか？」

一応駄目もとで聞いてみるが、予想通り…いや、予想以上の返事が返ってきた。

「あなたには、わたくしの侍女になつていただきます。」

「は？」

「王子殿下に相応しい侍女のあなたがわたくしの侍女になれば、すべてが丸くおさまると思いませんか？」

言つて私の手から箱を奪い取つた。

「あつ…っ…！」

取り返そうと乗り出した身は、横にいた色黒スキンヘッド男の剣先が喉元に当てられた事で元の場所に戻される。

馬車の中で短剣を突きつけられた時とは違い、冷ややかで鋭い眼光を瞳に宿した男からは本気の殺意が伝わってきた。

「それ以上抵抗しない方が良いですよ。この者は今回雇つた荒くれ共と違い、わたくし直属の部下の一人。汚い仕事でもわたくしの命令なら何でも忠実に実行します。意味、わかりますよね？」

それはつまり、命令があれば躊躇い無く私を殺すという事だろうか。

でもミラン卿が言っている事が嘘ではないと男の鋭い眼光が教えていた。

一つ呼吸をして息を整える。

「私は第一王子ルカシエーラ様の筆頭侍女です。王子以外の方に第一の忠誠を誓つことは決してありません。そして王子はお優しい方です。私を見捨てることもあなたを許すこともないでしょう。早めに私を城に帰す事を心からおすすめていたします。」

喉元にある剣の鋭利な光に目もくれず、ミラン卿の眼を見据えて進言する。

私の言葉に少しの沈黙で返すとミラン卿はニヤリと笑い返してきた。前髪で眼の見えない口元だけの笑みは必要以上に人に不快感を与えるんだなと初めて知った。

「では、これからあなたがわたくしに仕えたいと思うようになれば良いですね。」

(…さきほどの私の話を聞いてましたか?)

「だから、私は王子以外の…」

「わたくしに忠誠を誓いたいと思うようになるまで、ここにいることを許可します。」

「なっ…何を言ってるの?」

「そう、時間はたっぷりあるのです。連れ攫われた事は知っていても、ここにあなたが居る事は誰も知らないはず。わたくしの侍女になりたいと思える日まで、あなたはここで生活をすればいい。」

「ナイスアイデア!とばかりにポンツと手を打って笑顔を向けてくる。」

「この人何馬鹿な事言ってるの!?!と思いながらも本気でこの屋敷に閉じ込めるつもりだという空気を感じて、ここで過ごす事を想像して身震いした。」

「もちろん、不自由な思いはさせませんよ。望むものがあれば大抵のものは与えましょう。もちろん外部の者と連絡を取る事は禁止しますが、心配しなくてもそんなに時間はかからずわたくしの魅力に惹かれ自ら仕えたいと思えるようになります。」

この人の自信はどこからやってくるのだろう。

かなり自分勝手に自意識過剰な内容にあきれ返って口を挟めずにいたフィーナだったが、ミラン卿が顎で色黒スキンヘッド男に指示を出す様子を見て我に返った。

とつさに後ろの入り口から外に出ようと踵を返したけれど、色黒スキンヘッド男に腕を掴まれ捻り上げられて身動きが取れなくなる。

「いつ痛い！放してよ！！」

身体を捻って抵抗するが男の腕を掴む力はまったく緩まず、それどころか抵抗する私をもともせず両手首を紐で一纏めにされてしまった。

「この状況でまだ逃げようとするその勇氣に免じて、我が屋敷で一番景色の良い部屋を用意して差し上げましょう。お前達、最近入ったばかりという新人がいただろう？そいつにフィーナ殿を南の最上階部屋に連れて行かせ監視させなさい。他のものはわたくしと共においで。やっとこれが手に入ったのだから、思う存分楽しませてもらわないとね…。」

言って愛おしそうに箱を撫でながらミラン卿は階段横の扉に去っていった。

「…新人の男はどいつだ？」

「……………シン」

色黒スキンヘッド男が問いかけると、私の後ろにいたフェミニス

ト男が先ほどのシンという男の人を呼んだ。

呼ばれてこちらに近づく間もシンは私の顔を見ることは無い。
そのことに胸の奥がツキンと痛んだが私は気づかない振りをした。

「あの階段を左に進んだ棟の最上階が南部屋だ。連れて行き指示があるまで部屋の外で監視を続ける。」

色黒スキンヘッド男は私と部屋の鍵をシンに押し付けて指示を出す、他の者は俺に着いて来い！と言って男達を連れてミラン卿の後に続いた。

二人きりになったエントランスに遠ざかる男達の足音だけが響いて消えた。

「……………」

「……………」

「……………じゃー！」

ガシッ

言いながら入り口に行こうとするも手首の紐を掴まれて、失敗。

「もう、離してよ！…っきゃあぁー！」

逃げようと踏ん張った足は宙に浮き、腕は後ろで縛られたままシンという男の肩に担ぎ上げられてしまった。

そのまま階段を上って指示のあった部屋に行こうとする男の肩の上で足をばたつかせて抵抗を試みる。

が、

「そんなに嫌なら階段途中で頭から降ろしてやるよ。それが嫌なら大人しくしてろ。」

意地悪くわざと階段を上りながら落とすマネをされて、仕方なく大人しくするしかなかった。

こうなったら部屋についてからなんとか脱出を試みないと…

美術品の飾られた広い廊下を二階、三階へと上り、三階一番奥の部屋の中でやっと肩から下ろされた。

さっき肩に担ぎ上げられた時も思ったんだけど、この人そんなに体格良い人でもないのに、すごく力がある気がする。

物を持ちたり押ししたりする時に動きに溜めがない…というか。

よいしょっ！とか、どっこいしょ！という力を籠める瞬間というものがない…というか。

まるで重さを感じていない動作に似ているの。

私を担ぎ上げる時も下ろす時も、まるで人形を扱っているみたいだった。

でもそれが眼に見えてわかりづらいのは、この人が力任せに扱うのではなくとても優しく扱ってくれるから。

紳士的に、すごく、丁寧に。

「…ありがとう。」

壊れ物を扱うように静かに下ろしてくれて、悪い人だとわかっていてもついお礼が口から出た。

その人は驚いたような眼を向けたあと呆れたような溜息をついた。

「…後ろ向いて。腕、解いてやるよ。」

「あ、うん。ありがとう。」

今更ながらこの人と部屋に二人きりという状況に緊張してきた。静かな部屋にシンが紐を解く音だけが響く。

なんで、こんなに胸がドキドキしてるんだろう。

さっき会ったばかりの知らない人だから？

アステルやレインと二人きりでも、こんなにドキドキしたことはない。

自分のうるさい鼓動の理由を、紋章が浮かぶ短剣について問いただすのに緊張していると無理やり納得させる。

はらりと紐が解かれ、微かに赤くなつた手首を擦っていると後ろで衣擦れの音が聞こえた。

「お前、じゃじゃ馬って言われたことあるだろ？」

「え？」

後ろを振り向くと、シンが頭に巻いていた布と口元を覆っていた布を外して面白そうにこちらを見ていた。

見下ろす瞳は荷馬車の中で見た瞳よりも明るく意思を持つセピア色に輝いていて、縁取るまつげが濃い影を落としている。

均整の取れた顔立ちに、柔らかそうな琥珀色の髪が艶めいてサラリと揺れる。

やっぱり想像通り若い。

眼が合った瞬間、ドクン、と自分の鼓動が更に高鳴った。

心の中。

自分でも見えないほど深い深いところで、ずっと前から目覚めたがっていた感情が疼く。

嬉しい。

愛しい。

でもその時の胸の高鳴りの意味を知るのも理解するのも、もっとずっと遠い先のことだった。

第九話 じゃじゃ馬と王子

フィーナが連れて来られた屋敷の南の棟の最上階。

その一番奥の豪華な一室は入ってすぐ左側に天蓋付のベッドが置いてあり、その両側の窓は繊細なレース地のカーテンと金の刺繍が施されたワインレッドのカーテンが陽を浴びていた。右側にはソファアセットが置いてあり、テーブルには色とりどりの花が飾られている。

窓から見える景色からは屋敷と同じくらい背の高い木々が見えるばかりで、この屋敷の位置を特定するような物や建物は見えてこない。

でも今はこの屋敷から逃げる事よりも、外の景色を眺めるよりも、優先するべき事が目の前にあった。

「ああ、そうだ」

「な、何？」

人をじゃじゃ馬扱いしたその人は、頭から外した布を傍にあったソファの背に放り投げて突如入り口に向かって歩き始めた。

高鳴っている自分の鼓動と、問われたじゃじゃ馬発言で頭が真っ白になっていた私は黙ってシンの行動を見つめる。

色黒スキンヘッド男に言われた通りここに私を閉じ込めて監視する為に出て行くのだろうと思って、やっと一人になれるとその背中に向かって小さく息をついた瞬間、ガチャツと音がして鍵を閉められたと気づく。

鍵が閉められた事によって密室感がより濃厚になった。

「なんで中から鍵かけるのよ…部屋から出て行かないよう監視するなら外にいればいいじゃないの！」

非難の声を浴びせるも、シンは無言のままゆっくりとこちらに振り向いた。

ドクン

（ え？ ）

一瞬、体中に電気が走った気がした。

先ほどまで居たシンという人と、この人は違う…。

入れ替わった訳でも、容姿や服装が変わった訳でもない。

この人の身に纏う雰囲気や存在感、威圧感、瞳の奥の光の強さまでもが桁違いに輝きを増したように、

彼はそこに在った。

とてもじゃないが、一介の誘拐犯の一人が持つオーラではないと思う。

(どうして急に…)

顔を覆っていた布を取ったから？

鍵を閉めて仲間が入って来れないと安心したから？

変化が起きた理由を考えて見るけれど、これといって心当たりが見つかからない。

そんな単純な理由で人はここまで変わるのだろうか？

そんな訳、ないよね。

でも…なぜだろう。

彼が醸し出す雰囲気は少し前のものより心地良い。

目の前の変化に戸惑うフィーナにかまわず、ゆっくりと振り返ったシンは笑みを浮かべながら一歩一歩近づいて来る。

対して私も一歩ずつ後ろに下がる。

それに気づいたシンは小さくクスリと笑った。

「何？じゃじゃ馬が怯えてんの？」

「そ、それは関係ないでしょ！？」

「じゃあ下がるなよ。話があるからさ。」

と言って歩みを止めないまま腰にある短剣に手をかけた。

それを見た私は後ろに下がるスピードを上げた。

「こ、来ないで！私に手を出したらあのミランって人に怒られるわよっ……………っ！？」

ついには壁際に追い込まれてしまい、それでも左右に逃げようと顔を巡らすが笑みを深めたシンがすぐ目の前に来て顔の横に左手を付いた。

崖つぶちの抵抗で睨みつけてやろうと顔を上げたら、顔の前に短剣の刃を見せ付けられる。

思わず息をするどく飲み全ての動きを止める。

同時に、この人はいい人かもという自分勝手な想像が崩れ落ち、やっぱり他の人と同じ悪党なんだと落胆した。

(やっぱり殺されるのかな…)

まったく知らない人に勝手な期待をして勝手に裏切られて、そんな自分は本当に勝手な人間だなと思わずにいられない。

さすがの私も密室の状態で男に刃物を見せ付けられて、すぐに回避策を考え付くほど余裕はなかった。

怯えつつも悲しい眼で短剣を持つシンの手を見ていたら、上から優しい声が響いてきた。

「…この紋章、気づいたか？」

「…紋章？」

そういえば、と改めて短剣の刃をみると荷馬車で見た時と同じように紋章が浮かび上がっていた。

せっかくだから、先ほどからずっとしたかった質問をぶつけてみる。

「これ、この剣。なぜ、あなたが持つてるの？今回みたいに悪事に手を染めて奪った？これはある王家に伝わる剣で、あなたが持つていていいものではないと思うわ！」

話しているうちに感情が高ぶってしまい、最後の方は叫ぶようになっただ。

それでもシンは動じてはいないようで、ははっと軽く笑う。

何がおかしいのよ！

先ほどの恐怖や落胆、驚きなどの感情の行き場が逆切れという形で現実化した。

さらに追求しようと口をあけた時、

「これは俺のだよ。」

は？

「何を言っで…」

奪った物は自分のものでも言いたいもの！？

さらに怒りが増している私に対しても、彼はいたって冷静で、やっぱり楽しそうな顔をしている。

「王家に生まれた王子に一人一振り与えられるもので、これは俺の。」

「ここ見て…と言いなから壁から離れた手で刃に浮かぶ紋章の下の方を指差す。」

指差された所を眼を凝らして見ると、紋章と同じように小さい文字が浮かんでいた。

「……セ……ル……ク……？」

どこかで聞いたような？

私の眩きを聞いた彼はふわりと頷いて、

「セルク・フロル・デ・グランディア、これが俺の本当の名。
フィーナ・アルベルト嬢、ルカに俺の話は何も聞いてなかったのか
？今回花祭りに合わせて来る事も伝えてあったはずなんだが。」

ん？と首を傾げて聞いてくるが、すぐに返事は出来ない。

頭真っ白。

え？

どっついこと？

グランディアって……サウラ王妃が言っていたグランディア王子！？

そっいえば第四王子がセルクって名前だったような……。

「ええええええええ！！؟؟？」

思わず絶叫する私と、笑う彼。

だって…

「だって、私を誘拐したあの人たちの仲間でしょう！？それに、シンって名前が！」

「それはあいつらの仲間になった時に適当につけた名前。国に入る前に入った酒場で、雇われたらしいあいつらがペラペラ依頼内容を話してたから、どうせなら内側から計画ぶっ壊してやろうと思って仲間に入った。」

入ったって…

とてもじゃないが一国の王子という人が起こす行動とは思えません。

「でも、そんな情報を事前に聞いていたのなら、まず城に連絡を入れてくれれば良かったのに…！」

「もう少し探ってからでもいいかと思ったんだ。最初の計画では箱を奪うって話だったし最悪奪われたとして、俺が箱を城に持ち帰ればいいのかと思って。お前を連れてくる指示が出されてたのは予想外だった。…悪かったな怖い思いさせて。」

短剣を鞘に納めながら苦渋の表情で謝罪してくる。

その顔をさせてしまったのが自分だという事がとても心苦しかった。

彼はきつと始めから私を助けようとしていたに違いない。

荷馬車の中で私が無茶な行動を取らないようにわざと剣を見せて

威嚇し大人しくさせたのは彼。

他の三人だったら縛り上げられて視界も口も塞がれていたかも。

なんだかんだ、助けられていたんだな…。

「…あなたが謝る必要はありません。荷馬車でも、今も、助けてくれてありがとうございます。」

頭を下げて謝罪する私の顔を上げさせるように顎に手が添えられた。

見上げたそこには真上から興味深そうに覗きこむ整った顔。

触れられている場所から熱が広がるように、自分の顔が赤くなるのがわかる。

ドキドキと高鳴っていく鼓動を、胸に当てた両手で静めようと試みるが無駄に終わりそうだ。

「なん…ですか？」

沈黙に耐えられなくて眼をそらし問いかけるが、セルク王子は顎にあった手を滑らせるようにして額に上げると…。

「いたっ!!?」

デコピンしてきた。

反射的に胸に当てていた手で額を押さえようとしたらその手を掴まれて顔の横に押さえつけられる。

(なんなのっ!?)

真意の読めない行動の連続に先ほどまでとは違う意味で鼓動が早まる。

怒りさえ込み上げてきそうだ。

本当は王子である彼に失礼な態度をとったことを怒っているのかもと思った。

でも正体を隠していた自分にも責任があるし、一方的に怒られるのは納得いかないんですけど!?

手を塞がれたせいで擦ることも出来なく、未だにジンジンと微かな痛みを発する額に意識を集中しつつ心の中で文句を言っている私にはこの時セルク王子が顔を近づけて来ている事にも気づいていなかった。

(……………え)

額に柔らかく温かい感触が湿った空気と共に触れてきた。

何?と考えるまでもなく、目の前に男性らしい喉仏と鎖骨が見えて位置的に唇が額に触れているのだと気づく。

(からかわれてる!?)

我慢も限界にきていたフィーナが「何するの!?’と文句を言いながら顔を上げた瞬間、

今度は同じ感触が自分の唇に触れた。

それは額に触れた時よりも力強く、熱く、優しく、長い時間そこに在った。

第十話 キス

顔を背けることが出来ないほど強く押し付けられる唇をフィーナはぎゅっと目をつぶって受け入れていた。

頭の中では何で？どうして？という疑問が飛び交っているが、不器用に押し付けられている唇から意思を読み取れるほどキスに慣れている訳でもなく、閉じてしまった目を開けて表情を読み取るようにする勇気も羞恥にかき消されてこれっぽっちもない。

でも疑問は突然キスしてきたセルクに対してもあったが、自分自身にもあった。

（なんで私…嫌じゃないんだろう…？）

最初少し冷たかった彼の唇が自分と触れ合ってる内に熱を分け合い心地よい体温になっていくのを、嬉しいと感じてさえいる自分が不思議でならない。

きつと大暴れすれば止めてくれると思うけれど、そうしなければいけない理由が自分の中に見つからないのだから仕方ない。

（誰にキスされても受け入れる？…まさか、それはない！…一国の王子、だから？それとも彼、だから？）

不快感を感じないキスについて自問自答しながらも、大人しく受け入れていたフィーナにもついに限界が訪れた。

「っ！……っんー！！んー！！」

すぐに離れるだろうと思っていた口付けはフィーナの予想を裏切る長さで続いて、驚きのあまり呼吸もままならなかった為に羞恥だけでなく息苦しさでも顔が真っ赤になってきた。

たまらず押さえられて腕を必死に動かすと、気づいてくれたのか唇の押し付けが弱まった。その隙を逃さず急いで顔を背け、新鮮な空気を求める。

「ぶはっ！！はっ……………はぁ……………はぁ……………」

極度の酸素不足で目には涙が浮かび頭がクラクラした。

足の力も入らず、座りたかったけど拘束が解かれたのは唇だけ。

手首は相変わらず壁に拘束されているのでそれ以上の身動きは取れなかった。

怒りよりも恥ずかしさよりも息苦しさから開放された安心感から体の力を抜くと、壁に押さえられている手首がするつと開放された。

「あ……………」

ホッとした反面、寂しいと思ったのは一瞬の気の迷いだろう。

息を整える事に必死なあまり逃げようという考えもすぐに働かず動けないでいると、手首を開放した彼の手が優しく頭を撫でてきた。

「…大丈夫か？」

頭を撫でる手の温かさに落ち着き、その優しい声音に思わず素直

に頷いてしまう。

やっと呼吸は普通になってきたものの、真っ赤になった顔と身体が揺れるほど高鳴る鼓動はすぐには直りはしない。キスをしてきた人にどう接すれば良いのか、変に正気に戻ってしまった頭では羞恥が勝ってセルクの顔を見上げるのも難しかった。

(こんなことなら大声上げるとか…ビンタして逃げるとかしてればよかった！)

悔やむ気持ちを中心に叫んでみると、頭を撫でる手と反対の手が腰に回り密着するほど引き寄せられた。

「きゃっ!?!」

軽々と引き寄せる腕の力強さに胸がドキンと高鳴る。同時に目の前には整ったセルク王子の顔。

うちの王子様も綺麗な顔してるけど、セルク王子はまたタイプの違いが顔立ちで綺麗だった。もつと男らしいというか…色気があるというか…放蕩王子と呼ばれていたそうだから王室内とは違う、旅の中で身についた魅力もあるんだろう。

「え、何…?」

見上げたその彼の顔は今日見た中で一番の笑顔だった。

それも欲しかったものが手に入った時の嬉しくて仕方が無いという感じの満面の笑み。

なぜそんなに笑顔全開なのか不思議に思いつつも、その笑顔に見

惚れてしまい固まっていると、頭を撫でていた手が首の後ろを支えその指の隙間から髪がサラサラと流れ落ちた。

「なら…」

言葉を紡ぐその整った唇を自然と目で追う。

「今度はちゃんと息しろよ…?」

「え……………んうっ!!」

ぐつと顔が近づいたと思うと同時に唇を覆うように重なったそれは、先ほどよりも熱く深く、濃厚に攻めてきた。

口内に侵入する初めての感触に下腹がずくと疼く。

必死に逃げていた舌も簡単に絡め捕られ、抵抗しようとして押し返す行為も火に油を注ぐように激しさを増長させる行為でしかないように…。

角度を変えて何度も内も外も吸われる度に、彼の興奮した息遣いを耳で、前髪を顔面で感じて、人と…異性と触れ合っている事を嫌でも思い知らされる。

そして先ほどと違って息をすることを覚えた私の息遣いも彼の声

に混じって聞こえてきた。

それは明らかに興奮した女のものであり、本能のままに肌の触れ合いを求めたものだった。

「や……んっ、んん……あ……はっ……んん」

お互いの唾液が交じり合う音がしばらく部屋に響く。

先ほど開放された手は自らの意思でセルクの胸にしがみつき、腰に回された腕で厚い胸板に押し付けられてしまつと抵抗する力どころかまともに立っている事も難しかった。

(ダメ……離れないと……)

長いキスの中、ほんの少しだけ回復した思考が抵抗を試みる。震える身体を奮い立たせて何とか胸板を押し返し止めさせようとしたが、

「まっ……んっ……王子っ……んう！」

息継ぎの合間に言葉をかけるがそれはすぐに唇で塞がれてしまった。

抵抗は許さないとばかりに強く吸われ、閉じた目から涙がこぼれる。

(どうしよう。どうすればいいの?……ルーシェ!)

ビクンッ

「あ……………」

口内で触れ合っていた繋がりが突如水音を立てて離れた。

何事かと目を開けて見上げると、なぜか驚いたような彼の顔が自分を見下ろしている。

少し下に目をやると、開きっぱなしになっている二人の舌の間を銀糸が伝っているのが見えて、慌てて口を閉じ下を向いた。

(恥ずかしい!!何で私この人とこんなキスしてるの!!!!
!?!?)

これまでの人生最大ともいえる羞恥の出来事に軽くパニックを起こしそうだ。

唇に触れるともものすごく熱を持っていて、眼の奥も羞恥と興奮で熱くなっていた。

「お前…好きな男いるのか?」

「え?」

唐突に質問された内容が理解できなくて思わず聞き返す。

見上げた彼は神妙な顔をしていて、ふざけて質問している訳ではなさそう。

でも顔を見ると勝手に唇に目がいつてしまい、またキスされるんじゃないかと考えるともう顔も見えていられず、下を向いて首を横に振るのが精一杯だった。

「ふーん……」

軽い相槌を打ってから、何か考え事をしているらしい彼の手はもう私を拘束していない。

(とりあえず、距離をとらなきゃ！)

隙について離れようと改めて気合を入れ直した

その時、

ドゴーン！！！！！！

建物の外で爆弾が爆発したような大きな爆音がして、その爆発の大きさを表す大きな地揺れが二人を襲った。

第十一話 王子の目的

足元が揺れ、部屋にある大小のシャンデリアのガラスが細かく音を立ててぶつかり合い、天井からは揺れに合わせて白い埃が振ってくる。

「な、なにっ!？」

「こっちだ」

身体の中にまで響いてくる地響きの強さに啞然としてみると、セルクに腕を引かれてソファ側にある窓に連れて行かれた。

近づくとき黒い煙が昇っているのが見える。

そこは屋敷の裏側で、屋敷とは別にドーム型の大きな建物が建っていて煙はその裏側から昇っているようだ。

思わず駆け寄って窓を開け放つ。するとすぐに風に乗って新緑の濃い匂いに混じって焦げた匂いと砂埃の匂いもが部屋の中に入ってきた。

広がる裏の森から比べても巨大なその建物は、窓一つない丸い屋根をした建物で異質な雰囲気纏っている。

「あの建物は…？」

「ミラン卿の秘密の花園。もとい…実験棟だ。」

「実験棟？…何のですか？」

「さあ？俺は雇われたばかりだったから屋敷の奥に連れてつてもらったことはない。おそらくお前が持ってた箱の中身を実験中なんじゃないか？」

「実験つて…ええ!!!？あれを爆発させたってこと!？」

あまりの驚きに腕組して外を眺めていたセルクに掴みかかる。

「それは………」

ドーーーーーン！！

セルクの言葉を遮ってまた爆発が起きた。先ほどより衝撃は少ないが同じ場所で爆発したらしく、新たな煙が立ち上ってきた。

窓を開けていたせいで、先ほどより小さい爆発でありながら爆音と伝わってくる衝撃は身体に痛く響く。

「えっ……！！？」

（今の……）

爆音の中に微かに混じって聞こえたものがあつた。

「つたく、何を爆発させてるかは知らないが、今まで爆発させるような実験をしていると聞いた事はないな。あの箱、鍵穴が四つもあつたからもしかしたら爆発させて中身を取り出そうとしてるのかもしれないって………どうした？」

不思議そうな声で問いかけてくるのは私が窓枠を掴んで外を見たまま固まっているからだろう。

だって…二度目の爆発音の時に聞こえたのは…

「こえ…」

「なに？」

「声が聞こえたんです！今の爆発の音と一緒に女性の悲鳴が！！」
「なんだって？」

私の横に立って同じように爆発のあつた場所を見るが人の姿は建物の陰にあるらしく見えない。悲鳴らしき声も爆発の時に微かに聞こえただけだった。

でも聞こえた感じだと一人ではない。

「実験棟には女性がいますか？この屋敷自体に女性が働いたり住んでたりは？」

「この屋敷自体には女性はいない。実験棟には誰かが住んでいる、
というか実験を手伝う人がいるというのは聞いた事あるが女性とは
聞いてないな。」

「でも！確かに聞こえたんです！……助けにいかなくちゃ！！」
走り出し部屋を出て行こうとするのをセルクが腕を掴んで引き止
めた。

「待て待て、お前はここにいろ。鍵は俺がもつこれ一つだから俺
が鍵を閉めていけば誰もこの部屋に入れない。」

「あなたこそ！！」

「ん？」

「セルク王子こそ、この国の来賓なのです。わたくしが様子を見
てまいりますので、こちらでお待ちください。他国の王子殿下をこ
の国の揉め事に巻き込んでしまい申し訳ございませんが、早急に対
処いたしますので。」

「この件に関しては、最初に首を突っ込んだのは俺だぞ？謝る必
要はないだろう。お前だって被害者だ。」

「わたしはあの箱を第一神殿に送り届ける事が任務でもありまし
た。自分の仕事は最後まで自分で責を負います。」

「お前一人で何が出来るっていうんだ。城には応援の知らせを送
っておいた。しばらくすれば到着するはずだ。それまでもここで
じっとしてられないのか？」

「ただ待っているのは嫌なんです！！」

「……………」

「あつ…すみません。言い過ぎました。」

「いや…」

言い合いの熱は一気に冷め、居心地の悪い空気が周囲を取り囲む。

「……………本当に、時間がないのです。早くあの箱を神殿に届けな
ければ…。竜の花祭りのメインイベント自体がつぶれてしまいます。」

お祭りの為に来ていただいた方々の期待に沿えるためにもあれが必ず必要なのです。」

胸の鼓動が急げとばかりに騒ぎ立つ。

このままでは城のみんなにも、神殿のみんなにも合わせる顔が無い。

私に出来る事があるならやれることをやりたい。

自己満足かもしれないけど、黙ってここで待っていることなんか出来ない。

「とにかく、私は行きます。セルク王子はこちらで待っていてください。」

瞳に力をこめてセルクを見る。

セルクもしばらく見定めるようにフィーナを見つめていたが、諦めるような溜息を吐くと視線を逸らしてボソツと何かを呟いた。

聞き取れなくて「えっ？」と聞き返すと、伸びてきた両手に頭を掴まれて髪をわしゃわしゃ掻き回される。

「やっぱりじゃじゃ馬だな！って言ったんだよ！！！！」

「わっわっ！！やめて下さい！！」

その乱暴な手つきから逃れようと後ろに下がるが、髪が何かに引っかかるように伸びた。

みるとセルクがフィーナの髪を一房とって口付けをしているところだった。

間近でみた光景に顔に一気に熱が集まる。

「なっ、なっ、なにを！？」

動揺して固まっていると、今までで一番柔らかな微笑を向けてきた。

「俺がこの国に来た目的を教えてやるのか？」

「え？」

「知りたいか？」

「え、まあ…はい。」

突然なんだろう…？

「まずは、アルスメリア国に滞在して文化、社会を学ぶ。花祭りを楽しむ。ルカに久しぶりに会う。マーゼラの木苺パイとやらを食べる。」

つらつらと語りながらもフィーナの髪を指先で遊ぶ事はやめない。話す内容に耳を傾けながらも、髪先にある指の動きに意識がいつてしまう。

触れられている髪先からむずむずする感覚が伝わってきて自分の両手を握り合わせて耐える。

「わ、わかりました。王子の分の木苺パイも買ってきますから！だから、この手を…」

「そして一番の目的が、ルカの一番の侍女の”女”を連れ帰ること。」

その言葉の後、するりと髪が開放された。

ほっとして背を向けて数歩離れる。

でも実際はほっとしたのもあるけど、セルク王子から”女”という単語が出た事がショックで、その同様に隠す為にも背を向ける必要があった。

冷静に考えれば突っ込みをいれてもいい内容であったはずだが、思考回路がまともに機能していない今の状態では軽く聞き流している中でも引つかかる単語だけは耳に残る、という厄介な自体が起きてもおかしくない。

「あ…あーそうですか。気に入った女ひとがいらっしゃるなら、早く

連れ帰ればよろしいでしょう。花祭りは三日間ありますから、どぞその方と祭りを楽しむなり国に連れ帰るなり好きになさってください。私はやるのが山のようにありますので、箱をもって急ぎ帰らせていただきますね。」

つんと澄ましながら言ってるものの心の中は荒れまくり、「落ち着く」を通り越して落ち込んだ。

なんだ、お目当ての方がいるんじゃない。そうよね、各地を旅してるって言ってたしお気に入りの方が何人かいてもおかしくないよね。

じゃあ…

じゃあ、なんで私にキスなんて。

胸の奥がぎゅっと締め付けられるように痛い。

きゅっと唇を噛んで突きつけられた事実を咀嚼して心の整理をしようとするがうまくいかない。

自分の事に精一杯で周りを見る余裕のなかった私は後ろから近く足音に気づけずにいた。

「わかった。」

言葉と同時に後ろからぎゅっと抱きしめられる。

「えっ！？王子？」

思わず身を振った私の力なぞ物ともせず更に腕に力がこもる。

「とりあえず、ここでの用が終わったらマーゼラの木苺パイを買いに行つて、お祭りを楽しんだら城に行くか。王や王妃にも挨拶したいし、許可も取らないといけないしな。」

楽しそうに人の頭に頬をくつつけて話す人は声だけで上機嫌だということ判る。

「許可？なんのですか？」

「そうそう、その敬語もやめてもらおうか。呼び方もセルクでい

いぜ、ファイナ」

「出来るわけありません！」

「なんで？荷馬車の中とか部屋にくるまでは普通だっただろ。」

「それは、王子殿下だと知らなかったから…」

「その王子が良いって許可してるんだからいいだろ。言う事聞いてくれないってルカに言いつけるぞ？」

「うっ…」

「ってことで敬語は禁止な。状況によつての使い分けはまかせる。」

「

「…はい。」

もう腕の中でもがくのにも疲れてきて会話にのみ集中する。

人と触れ合うのが好きなのかな…と視線を落として抱きしめる腕を見つめる。

「まさか本人からの許可がこんなに早く取れると思ってなかったから、こんな事件が起きた事にも感謝する部分もあるかもな。」

そつえばさつきも許可がどうか…

「あの、おう…セルク？許可って、なに？」

「さつき言っただろ。女を連れて帰るって。」

「聞いたけど、誰が許可したの？」

「お前。」

「や、そついうのは、本人の許可がないとダメだと思っただけど？」

「だから、ファイナが許可くれただろ？」

なんだろう、この噛み合わせの悪い会話は。

「私の許可ではダメです。あ、ダメだよ！」

「なんでだよ。」

「なんでって…」

何かおかしい。

抱きしめる腕、背中に感じるセルクの身体からフルフルと細かい振動が伝わってくる。

第十二話 少女の涙

お前を国に連れて帰る

「な、にを……」言ってるの？

綺麗なセピアの瞳をじっと見つめるが、揺れる事なく強い光を放つそこには何の答えも見出せない。

セルクが真剣な眼差しで放った言葉を頭の中で繰り返しているうちにある一つの考えが浮かび、そのせいでどんだん心が冷えていく自分を感じた。

「……………」

「フィーナ？」

初めて会ったこの人に国に連れて帰ると言われる覚えがない。

先ほどのキスは挨拶みたいなものだとして、私を国に連れ帰りたい理由はなんだろう。

そう考えて一つだけ可能性を思いついた。

それが本当かどうかはわからないけれど、本当だったらと考えただけで胸が痛む。

先ほどまでの興奮したやりとりから一転、沈み込み俯いて考え込む私の前にセルクが一步近づいて顔を覗き込んできた。

フィーナは覗き込んでくるセルクの目を見ることが出来ず、顔を逸らして聞いた。

「……頼まれた、の？」

「は？」

「私を、グランディアに連れて行って欲しいと、誰かに…」

怖くて名指しで聞く事は出来なかった。

もし本当にそんな事を頼むような人がいるとしたら、私が王女だと知っている人の可能性が高い。ということは、私の大好きな人たちの誰かだということ。

悪意を持つてではないかもしれない。

私の為を思つてのことかもしれない。

でも、理由はどうでもいい。

ただ、国を出て欲しいと思つてる人がいるかもしれない。そう考えただけで胸が張り裂けそうに痛んだ。

そう思う人がいてもおかしくないことも分かつてる。

私は、歩く王家の秘密、だから。

少しの沈黙の後、セルクは落ち着いた声で答えた。

「…ああ、そうだ。」

やっぱり……。

「ルカに頼まれたんだ。」

「……………え？」

嘘……………。

ショックで頭の中が真っ白になる。

「フィーナは女らしさ、落ち着きが足りないからグランディアで花嫁修業でもさせてやってくれ、って。」

「……………はな、嫁、修行？」

真っ白な頭では意味を理解するまで結構時間がかかってしまった。問いかけと共に顔を上げるとセルクは腕を組んで楽しそうに見下ろしていて、からかわれたのだと気づく。

「じよ、冗談言わないで！王子がそんなこと言うわけ……………」

「言うわけないか？」

「……………」

言うかも。

普段から言いたい事ずばずば言っちゃうし（だって兄妹だから遠慮なんてないような時もあるし）、剣や弓だって教わってるし（周りは騎士とか多いから…）、他の女性達のように普段から着飾ったりとかもないし（侍女の仕事してたら私生活も仕事のうちだもの）。

来賓、来客の前でだけ有能侍女の顔してたって貰い手ないんだからな！！

とも言われた事があるようなないような…？

「な？王子の許可は出ているようなもんだし、一度遊びに来るよ
うな気分がいいからさ。」

「う…ん。わかった…？」

「なんで疑問系なんだよ。まだ疑ってるのか？」

「いや、だって…」

なんだか納得いかない気がするけれど遊びに行くということであ
ればここまで悩む必要はないのかと思い始めてきたので、とりあえ
ずは了承してみる。

それにアルスメリアの国より外に出た事が一度も無い為、好奇心
の方が勝って嬉しいという感情すら湧き上がって来る始末だ。

話が本当なら国を出ていいって許可だものね！

自然笑みの浮かぶ顔で、他国での生活に思い馳せているとセルク
が耳元に口を寄せて囁いた。

「一生、俺の元で花嫁修業してくれてもいいんだぜ？昼も…夜も
…、な」

「…っ！」

耳に感じた温かい吐息と台詞に驚いて顔を真っ赤にしてセルクを
突き飛ばす。

突き飛ばされた方は痛くも痒くも無いようで、楽しそうに笑って
いる。

「はははっ！さーて、俺の目的を理解していただいたところで、さっさとこの事件を解決して祭りを楽しみに行くぞ。詳しい話は祭りが終わってから話そうぜ。」

「…もうっ」

こうやって話していても本当に王子らしくない人だなと思う。

気さくだし、屈託無く良く笑うし、スケベだし……。

アルスメリア城を訪れた各国の王族達は皆気品に溢れ、気位の高い人が多かった。笑う時も口角だけを上げて笑うか見下すように鼻で笑う方が多く…アルスメリアの王族だけが変わっているものだと思うっていたのだけだ。

「…グランディア王家も変わってるのかしら…。」

それともセルクだけ？

ポソリと呟いた言葉は自分の耳に聞こえるだけの音量しか持たないはずで…、

「それは自分の目で確かめろよ。」

すでに部屋の出口にたどり着いていたセルクが取っ手に手をかけたまま振り向いてそう言った。

聞かれた事への気まずさに言い訳をしようと口を開いたが、楽しそうな、けれど優しく笑む彼は私の気持ちなんて全て分かっているような気がして。

一つ頷いて笑いかけることで返事とした…。

「くっそー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

男の叫び声に周囲に居た女の子達はびくりと身体を震わせ、手と手をとって縮こまった。

年齢は見た目から7歳から12歳位の女の子達が十人。

着ている服は色鮮やかなワンピースを皆身に着けているが、その顔は曇っていて笑顔はない。病的に白い肌に目の下にはクマの目立つ子も多い。

ここはミラン卿の実験棟の中。

普段は花の匂いだけが充満しているはずの建物内は、今は火薬と焦げた匂いに満ちている。

自らも顔に黒いススを付け、恐ろしい形相で見つめる先にはフィーナから奪った木箱がある。

何度か爆破させたにもかかわらず、傷一つなくそこにあった。

「なんなんだこの箱はっ！！ただの木で出来ているのではないのかっ！？」

叫ぶミラン卿の問いに答えるものはいない。後ろからは新たな爆薬をもった男達が入ってきた。

「鍵師を呼んで開けさせたほうがいいのではないですか？」

爆薬をミラン卿に差し出しながら色黒スキンヘッド男が問いかける。

「やろうとしたが、鍵を開ける道具自体があのか鍵穴に入っていないんだ。触ると確実に鍵穴は開いているのに道具は通してはくれない。忌々しい……！！これが王家の結界か！？」

肩で息をしながら差し出された爆薬に手を伸ばそうとして、その手は空中で止まる。

「……………」

「どうしました？」

「あの女……」

「女？」

「屋敷に閉じ込めているフィーナを連れて来い。あの女なら、この箱について何か知ってるはずだ。」

色黒スキンヘッド男は主の考えている事を汲み取り、一つ頷くと部屋の隅に控えていた一人の男に命じた。

「おい！その男！！屋敷に戻ってあの女を連れて来い。暴れるようならまた縛り上げてもいいが、気絶だけはさせるなよ。聞いた事があるからな！」

命じられた男は一瞬視線をミラン卿に流してから無言で部屋を出て行く。

「……ここまで手間がかかるとは予想していませんでしたね。あの女が鍵を持っているとも思えませんし、第一神殿にいけば鍵は手に入るでしょうが、それこそ簡単な事ではない。」

口元に手を当て呟きながら考え込むミラン卿の顔は歪み、思い通

りに行かない現状にイライラを隠せない様子だ。

そんな彼におずおずと話しかけようとする少女がいた。

「あ、…あのミラン様。」

「……………」

ミラン卿は威嚇するように少女を見るが、それも一瞬で視線は箱に戻される。

何の興味もないという風に。

それでも少女は引かなかった。

腕に抱く少女の為に。

「あの、この子、さっきその植物で手首に怪我してから具合が悪みたいで…。部屋に戻って休ませてあげてもいいですか？」

その子は女の子達の中でも年長にあたる子らしく、その子を中心として集まり身を寄せ合っていた。

具合が悪いという少女は赤い顔をして息も荒く、座っている事も辛い風で年長の少女に凭れ掛かって目を閉じている。

ミラン卿は一瞬だけ少女と、少女に凭れ掛かる子を見るが、やはり興味の無さそうに目を逸らす。

やはりダメかと肩を落とした少女に声がかかった。

「……………アリウム。」

「は、はい！」

「残念ですが、その子は諦めなさい。」

「……………え？」

アリウムと呼ばれた年長の少女だけではなく、その周りにいる女の子達も目を瞠ってミラン卿を見つめた。

「そこにある植物とは、緑に白い線の入った草のことでしょうか？」

「あ、…はい。そうです。」

アリウムは後ろを振り返り、その植物を確認する。出入り口付近にあり、最近になって移植された変わった柄の植物だから間違いは

ない。

「あれの葉には猛毒があります。もしあの植物で切ったのであれば、具合が悪いのは毒のせいでしょう。そして研究中のため、わたくしも解毒薬を持ってはいない…。治療するだけ無駄ですよ。」

「そんな…!!」

女の子達の少女特有の甲高い悲鳴が部屋に響く。

だが幸いにもアリウムの腕の中の少女は気絶してしまい、今の事実が聞こえぬまま荒い息をはいてた。

「黙れっ!!!」

非情な発言をしたミラン卿への抗議の悲鳴は色黒スキンヘッド男の怒号のような一言で遮られ、部屋の中は強制的な静寂で包まれる。

静まり返った部屋の中、ミラン卿の溜息が一つ。

「そんなに助けなければ、自分達の力で治してあげればどうですか？お前達は幼いとはいえ、わたくしが選り抜いた正当な竜の血を引く珠巫女たまひめなのです。治療や生命の活性化は得意中の得意でしょう？今その力を使わずしていつ使うのです。」

淡々と語るミラン卿の声は冷め切っていて、本当にどうでもいいという事がありありと分かる。

それは言われた内容からも汲み取れた。

「まあ、植物の美しさを通常より長く保持する事と、擦り傷を治すこと位しか出来ないお前達の小さな力では全員でかかっても治るとは思えないですけど。」

そう言っただけで鼻で笑う男の顔を、目に涙をいっぱい溜めてアリウムは睨んだ。

悔しいがミラン卿の言うとおりなのだ。

小さな怪我を治したり、小さな花を咲かせる事は出来る。
でも、それだけだ。

病気を治したり、毒を消したりなど私達に出来るはずもない。
風邪をひいた時でさえ、皆で助け合い慰めあうことしか出来ず、
痛みを取る事も出来ず、ただ耐え苦しみが去るのを待った。

くやしい…!!

こんな男に買われ珠巫女なのだと教えてもらい力の使い方覚え、
この人の役に立っていると一瞬でも誇らしく思っていた最初の頃が
本当に恨めしい。

珠巫女という存在がどれだけ小さな存在か、身に染みてわかって
いた。

何度も逃げようとしてその度に捕まり、あげく他の子たちを盾に
され逃げられなくなった。

神頼みなんかとうの昔に捨てたはずだった。

頼る人も家も無く、一人彷徨っていたあの頃に。

でも今は神にでも何でも、祈るから。

だから

どうか

お助けください。

少女は目を強く閉じ彼方の空に祈る。
流した涙は祈りと共に大地へと還っていった。

第十三話 不意打ち

「花の種？」

「そう！」

フィーナとセルクは部屋を出てひたすら長い廊下を走っていた。他に人の気配も無く、話し声は廊下に反響し散っていく。

「あれはお祭りで作られる竜の模型の両目を飾る大花の種。本来は百年に一度しか咲かない花を、珠巫女たまみしの力を使って一日だけ咲かせるの。」

「ふん。だったら祭りの最後の日にさえ間に合えば大丈夫なんじゃないのか？」

「それが、百年かけて咲く花を一瞬で咲かせられるほどの力は珠巫女全員を集めてもなくて…。だから二日間かけて巫女たちの負担にならないように時間をかけて咲かせているの。せめて夜までには神殿に届けないと、本当に間に合わないかも。」

「ミランは知ってると思うか？箱の中身が花の種だと。」

「たぶん…。あの花の種はもうこの世にあの二つしか存在しないと言われてて、価値としては国宝級だから自分の成金コレクション

にしたかったんだと思う。」

「じゃあ球巫女を自分で集めて花を咲かせることも？」

「もちろん出来る、と思う…けど、そんなことを考える人がいるとは思ってなかったし…、でもミラン卿ならやりかねない気がする…。」

「だな。」

走りながら周りを見渡すとエントランスと同じように廊下中にも煌びやかな調度品が並べられ、この屋敷自体がああ男のコレクションルームのように思える。

片っ端から壊してやるうかとも思ったけど作った人には罪はないし、やめておいた。

走る先に見える突き当たりには天井からシャンデリアが吊るされていて、そこがエントランス上空の吹き抜けらしい。

二人で手すりにそっと近づいて下を覗いて見るとエントランスには人もいなくて、静まり返っていた。

「よかった。誰もいないみたい。今のうち急いで下に行こう！」
ほっと息を吐いて誰もいないうちにと、急いで階段に足を向けたところで後ろから腕を掴まれて引き戻された。

不思議に思っただけ振り返るとセルクがエントランスを見下ろしながらニヤリと意地の悪い笑みをこぼしていた。

「ど、どうしたの？」

「急いでるんだろ？」

「そつだよ！だから早く…！」 掴まれている腕と一緒に引つ張つて急かしてみるもののビクとも動いてくれない。

「最短コースあるんだけど、どう？」

「どう…って。他に道があるの？」

見渡す限りそんな道は見当たらない。奥に続く廊下と手すりを越えて4、5階分眼下に広がるエントランス、そして後ろには階段。窓から外を見下ろした時、近くに掴まれそつな木もなかったから窓からも無理だろう。

「高いところは平気？」

不思議に思つてるところにされた質問に疑問を抱きつつも素直に頷くと、覆いかぶさるように近づいてきたセルクの左腕にひょいっと子供抱きされてしまった…！

「ちよつ！！何っ！！？」

驚いて暴れた拍子に落ちそつになつた為、とつさに目の前に首にしがみついた。

男の人に抱きつく形になつてしまい、慌てて身体を極力遠ざけてみると今度は目の前にセルクの端正な顔があつて顔に熱が集まる。

真近に見える端正な顔が白い歯を見せて楽しそつな笑顔に向けてくるが、正直その笑顔には嫌な予感しか感じない。

そもそもこの歳になつて男の人に子供抱つこつてどうなの…？

「お、重いから下ろしてよ！自分で歩けるつてば！」

そつ言つてはみるものの、重たがつてる素振りも様子もない。本

当に片手で軽々といった感じだ。

「だから、歩いてたら時間かかるだろ？」

「じゃあ走れるから！！」

「走るより早いつて！！」

笑顔で笑うセルクに対してフィーナの顔は焦り一色だ。

もう一度抗議しようと思えば口を開いたら突然フワッと身体が浮く感じがした。

え？と思って下を見るとセルクはフィーナを抱えたままエントランスを見下ろす手すりの上に立っているではないか！

短い悲鳴をあげて再度セルクの首にしがみ付く。

「何してるの！！？危ない！！降りてー！！！！」

セルクの耳元で叫ぶけど聞いてませんという風に無視された。

階下から背中に這い登ってくる風に背筋がぞわぞわする。

少しだけ下を覗いてみたけど、クラリと眩暈を感じてすぐに止めた。

何で手すりに乗るのー！

考えたところで、ふと気づく。

……え。

…まさか！！！！！！？？？？？？？？

死ぬ!!!!!!

ありえない————!!!!!!

馬鹿!!!!アホ!!!!間抜け!!!!スケベ!!!!放蕩王子!!!!!!
!馬鹿王子————!!!!!!

4,5階はあったであろう階から飛び降りて大丈夫なわけないじやない!!

助けて————!!!!!!

心の中で罵詈雑言を吐き出してセルクの首にありったけの力でしがみ付いていた。

体の中に直接響く内臓が押し上げられる浮遊感と、しがみ付いていないと身体が宙に投げ出されそんな不安が手足中に広がる。

それでもいつかは終わりが来る。

細めた瞳の先に、流れる景色の終焉に、エントランスの地面が近づくのが見えた。

みんな心配かけてごめんなさい！

怪我するかもしれないけど、怒るなら、怨むならセルクにしてね
!!!!!!

来るであろう衝撃と痛みを覚悟してフィーナはぎゅっと目を瞑った。

ト
ン
シ
ー
!

?

.....???

あれ？

まだ、地面につかない？

どうなって...？

「フィーナ？着いたぞ？」

「え？」

ぱっと目を開けるとすぐそこに地面があった。

顔を上げるとそこは確かにエントランスで、遙か上空には先ほど真横に見えたシャンデリアが吊るされている。

「どうして…」

「な？この方が早かっただろ？」

唾然とするフィーナに気づいているだろうに、得意げに言うてるセルクに一気に頭に血が昇った。

「あんな高いところから無事に降りて来られる訳ないでしょう！」

別段痛いところもないのか、先ほどと変わらず片腕にフィーナを子供抱きしたまま飄々と立っている。

「い、痛いところないの？怪我は？つてか降ろしてよ！！ああ！
！思いっきり首絞めちゃってたけど苦しくなかった！？何で無事に着地出来たの！？なんかロープでも使った！？」

矢継ぎ早に質問しながらセルクの腕から降りて身体を観察して見るけど、やっぱり怪我はしてないみたい。

信じられない！！

あんな高いところから飛んで大丈夫な人なんてありえない！

でも、まさか…。

「…グランディア人は空が飛べるの？」

一つ呼吸を置いてからすっごく真剣に聞いてみた。

「……ぶっ！！」

笑われた。

しかも大爆笑。

恥ずかしくなって真っ赤になった顔を誤魔化すように反論する。

「人が真剣に聞いているのに！！だって、じゃなきゃ、おかしいじゃない！！」

顔を真っ赤にして怒るフィーナに対して、セルクは笑いで滲んだ涙を指先で拭いながら頭をぼんぼんと撫でてきた。

「まあ、あそこから飛んで無事なのは俺くらいだろうな。グランディア人は身体が丈夫な奴はたくさんいるが、空を飛べる奴は一人もない。怖い思いさせて悪かったよ。」

その軽い謝り方に反省の気持ちがかもっているとは到底思えなかったけど、笑っているし、怪我も本当にしてないみたいだし、次第にまあ、いつかという気にもなってきた。

でも高鳴っていた心と身体は落ち着きを取り戻しても、胸のモヤモヤはまだ晴れない。

自分の身を危険にさらされた事よりも、あんな無茶を平気でしてしまっセルクに腹が立っていた…その気持ちは拭えていない。

笑っセルクをキツと強く見つめて言い放つ。

「もうっ…無茶はしないでっ！今回はたまたま無事だっただけかもしれないでしょう！？怪我で済めば良いけど死んだりしたらあなたには悲しむ人がたくさんいるのよ！！」

もしかしたらこの人にとってはこんなこと日常茶飯事のことなの

かもしれない。

私なんか心配したって、見ていないところではきっと平気で無茶したりするんだろう。

でも、知って欲しかった。

さっき出会ったばかりだけど、私がこんなに心配していること。

余計なお世話かもしれない。

迷惑かもしれない。

セルクがどんな顔をしようと、どう思おうと言わないと気がすまなかった。

おそらく興奮で顔を真っ赤にしている私の顔を、瞳を大きく見開いて見つめていたセルクがふいに右手を上げた。

(殴られる!?)

きゅっ

「...え?」

次の瞬間、なぜかセルクに抱きしめられていた。

なに？どうして…？

「セル…ク？」

「主人と従者って似るんだな。」

「へ？」

「ルカとお前だよ。あいつがうちの国に来て俺と出会って初めの頃、同じような感じで怒られたんだ、俺。」

「王子に？」

るかしえーら
王子もよく無茶して私に怒られるけど、その王子に怒られるという事はそうとう無茶したんだろうな。

「そう。…いい奴らだよなあ、お前ら。この国の人ってみんなそうなのかな？」

自分の事を含めて、国の人たちを褒められてなんだかくすぐつたくなった私はい笑ってしまった。

「ふふっ。そう、みんな良い人達ばかりだよ。…だから、この国では無茶はダメ。」

「…善処するよ。」

会話をしながらなんで抱き合っているのかふと疑問に思ったけど、不思議と先ほどまでの不安とか興奮とかがすーっと消えていくのを

感じていた。

会話が終わってもまだ抱き合ったまま、目を閉じてすぐ傍の体温を感じていると、後ろから風を切る音がした。

(なんだろう?)

疑問に思った時には私はセルクに抱きこまれたまま横に飛び、直後今まで居た場所を突き抜けて大きな壺が壁に激突して粉々に割れた!!!

「きゃあ!」

その割れる不快な音が響ききる前に今度はシャンデリアの細かな光を反射しながら大剣が弧を描いて二人を襲う。

横目に見える光景に鋭く息を吸った。

空気を巻き込むようにすごい勢いで振りかぶってくる大剣は大人の身丈程もある大きさで、それが確実に私達を捉えていた…。

(間に合わない!)

避け切れないと判断して目を伏せた。

ギンッ!!

鋼と鋼がぶつかり合う一瞬の音が部屋に響く。

はっとして見上げると、セルクが右手に私を抱いたまま左手に短剣を持ち、その片手だけで大剣を受け止めていた。

その顔は苦しげでも無く余裕を残したまま。

両者力を入れたままの刃の隙間からは力チカチと音が小さく鳴り響いている。

あの剣を受け止めたという光景に啞然としてセルクの顔を見上げてみると、その口から出会ってから今まで聞いた事のない怒気を含む重い声が発せられた。

「どういつつもりだ？」
「ダヤン。」

初めて聞く声に驚きつつも、ダヤンと呼ばれた大剣の主に向ける。

「あっ！」

それは私を荷馬車から下ろした、あのフェミニスト男だった。

そうだ。期間限定とはいえ一時的に仲間同士？だった二人だもの名前を知っていて当然だろう。

でも何で攻撃してきたんだろう。

二人の様子を見る限り、ダヤンと呼ばれた男は両手で大剣を握り締め精一杯力を込めているのがわかる。本気で攻撃したということだ。

そりゃ、部屋で待機と言われていたにも関わらず私と一緒にここにいるのだから、怒るくらいはするだろうけどいきなり攻撃はどう

かと思う。

なんてひどい人なんだろうと考えて勝手にイライラしていたフィーナだったが、この考えとかけ離れた事を二人は話し出した。

「部屋で待っているよう言ったはずですが、セルク。」

「だから、これか？」

ダyanは横目で刃の合わせ目を指して言うセルクを一瞥して、次にフィーナを見た。

「フィーナ殿まで連れ出して、何をしているのですか。」

「連れ出してって…こいつが行きたいって言ったんだぞ!？」

「それを止めるのもあなたの役目でしょう。まったく…上から降りてきたのを見たときは本当に驚きましたよ。」

「全部俺のせいだよ…」

「自覚が足りないと言っているのです。フィーナ殿まで怖がらせる必要はないはずです。」

「今!この状況を一番怖がらせてんのはお前だっつーの!!!いい加減剣を下ろせ!!!」

おや?と言う顔をした後ダyanは静かに大剣を下ろした。

セルクも「まったく…」と文句を言いながら短剣を腰にしまう。

二人の間にあった切迫した空気がなくなり無意識に詰めていた息

を吐いて改めてダヤンを見ると、数刻前には見られなかった笑顔がそこにあって驚いた。

「あ、あの……」

状況としては敵に見つかってしまったようなもののだが、セルクの知り合いでもあるし、どう声をかけたら良いか迷っていると横からセルクが紹介してくれた。

「さっき会ったから顔は知ってるだろう？ここの奴らの仲間ってことになってるけど、こいつ、俺の従者でダヤンっていうんだ。」

はい！？

「先ほどは手荒なマネをして悪かった。セルク王子の従者でダヤンという。よろしく！」

びしーっと親指突き立ててくるダヤンの顔は敵地には似合わない笑顔で。

最初の印象が無口で乱暴なフェミニスト男だったその人は、実は白い歯の似合う笑顔の素敵な人でした…。

第十四話 力と体

長めの黒髪を頭の後ろできゅっと一纏めにして、それによって露わになる意志の強そうな眉と理知的な瞳が印象的な彼。

初めて会ったときは口元にマスクをしていたので表情がわからず怖いというか威圧的な印象しかなかった彼は、実は白い歯を輝かせた笑顔が似合う男性で名を

ダヤン・スミル（28）と紹介された。

意外と人懐っこい性格らしく、伝わってくる空気は柔らかくセルクとも主と従者の関係にあるとは思えない位楽しそうに話をしていく。

でも気になる事が一つ。

セルク王子よりも幾分がっちりとはしてるけど、そこまで体格の違いがあるとは思えないその人は背中にも身の丈と同じくらいの大剣を背負っている。どう見てもとっても重そうだし、この人が扱うには違和感がありすぎる気がして…思わず聞いてみた。

「あの…ダヤン、さん？」

どう呼べば迷ったあげく、とりあえず”さん”付けしてみる。

私の呼びかけに隣の王子と言いかいのような話し合いをしていたダヤンがきょとんとした顔でこちらを向いた。

「はは、ダヤンでいいよ。どうした？」

「あの、その大剣。重くないんですか？」

「へ？」

そんなに意外な質問だったのか、ダヤンだけでなくセルクにも不思議な顔をされてしまい羞恥から顔に熱が集まってきた。

「え、と、アルスメリアにも騎士はたくさんいるし、街中で旅人の方をたくさん見た事ありますけどそんなに大きな大剣を背負って実際に使っている騎士様は見た事がなかったの…。」

二人の凝視する視線に押されるように言葉尻が小さくなってしま

う。

「すみません。ただの興味本位なんですけど気になってしまっ

…。」

ダヤンは表情を変えず何の反応もしてくれない…。

しちやいけない質問だったのかしら…。

でも気になるし。

質問を取りやめようか迷っていると目の前に大剣がドンツと立てられた。

「えっ!？」

私の身長よりも大きいそれは、そこにあるだけで重厚感がすごい。長さもそうだけど、普通の剣と違って刃がそんなに鋭くない代わりに厚みが凄く振り回すだけで威力が強そう。

…振り回せば、の話だけ。

ダヤンが支えてくれてるけど、倒れてくるだけの大剣を支える事も私には無理そうだ。

「フィーナ殿、持って見るか？」

「あ、フィーナでいいです！えと…いや、たぶん無理。だけど、やってみていいですか？」

ダヤンは笑顔で頷いてくれた。

おそろおそろ持ち手を握り、息を大きく吸う。

「んっ！！！」

力を入れて持ち上げるゝっが！数ミリ浮き上がった時点で腕がプルプルいってこれ以上は無理っ！！

「っゝゝもうダメっ！！」

ドンツとまたもとの位置に大剣を下ろして私は大きく息をついた。ほんつとに重すぎる！さっき振り回してたのは私の見間違いかもしれないっ！！

肩で息をしながら本気でそう思っていると、目の前の大剣が音も立てず上空に持ち上げられた。

「うわあゝ」

ダヤンが片手で軽々と持ち上げて、頭上に掲げていた。

思わずすごい！と言いながら拍手。

そんな私をみてダヤンは苦笑しながら背中の中の大剣をしまう。

「俺は片手で持つ事は出来るが、振り回すのは両手じゃないと出来ない。まあ、いつかは片手でも振り回せるようになりたいとは思ってはいるがこの重さだ。並大抵の努力じゃ無理だろうな。」

「片手で振り回すって…そんなに重い剣、片手で持ち上げるだけでもすごいのに…。扱えるだけでも凄いと思いますよ？」

「まあ、機能的にはこれでも充分なんだが、主に劣るとなると話

は別なんだよな。」
ん？主？

「主つて、セルク、様の事ですか？」

「ああ。」

二人でセルクの方を見ると視線を感じたのか「ん？」と首を傾げてこちらを向いた。手には紙とペンを持ち、何かを書いていたようだった。

セルクに劣るってどうということだろう。

「この大剣はセルク王子から譲っていただいたものなんだ。」
ええ！うそ！セルクがこれを使ってたつて事！？
いやいや、王族だし只単に所有していただけとか…。

「それでは…セルク、様も大剣を扱えるということですか？」

「もちろん。しかも片手で振り回せるほどに、ね。」

「ええっ！！！！！」

でもそういえば、さっき大剣で攻撃された時、軽々と短剣で大剣を受け止めていたような…。

それに人一人かかえてあんな高いところから飛び降りるつてもやっぱり凄すぎるというか、人間業とは思えないよね。

ますます納得のいかない不思議そうな顔をしている私を見かねたのか、ダヤンが説明を続けてくれた。

「俺はグランディア王国の人間だが、一般のグランディア人はこんな力は持っていない。俺は竜の血が少しだけ濃いんだ。」

…竜…

そつだ。グランディア王国にも竜の伝説があつて、アルスメリアが知と技を受け継ぐ王国に対して、グランディアは力と体を受け継ぐ王国のはず。

「アルスメリアには珠巫女たまみこという存在がいるんだろう？グランディアにとってのそういう存在だと思つてくれればわかりやすいんじゃないか？ただ、珠巫女と違つてこちらでそんな力をもつていても特別視されるような存在ではないがな。」

「どうしてですか？」

「たかだか他の人間より力が強いとか、体が丈夫だつてただけだ。崇められるような存在になるわけないだろう？そんなやつは国中にいるからな。しかも竜の血が比較的強い奴も男ばかりで、狙われたところで自分で自分を守ればいいだけだ。」

「…なるほど。」

確かにアルスメリアの珠巫女とは立場というか扱いが違うのも納得かも。

「セルク王子は王族であり、竜の血を特に強く受け継いでおられる。他の王子方も同じくらい竜の血を受け継いでおられるのかもしれないが、あそこまで力を使いこなせるのはグランディア国内でも一人か二人しかいないだろうな。」

つまり、グランディア国内の1、2の実力者の一人がセルクつてことよね。

まだ出会つて数時間しか経つてないし、粗野な雇われ兵のシンの方がイメージが強くて、王子様のセルクがよくわからない。

無茶で無謀でスケベというのは嫌でも思い知らされたけど…。

今までを思い起こしてつい先ほどの部屋での事を思い出してしまった。

ぼつと顔が赤くなる。

(ま、まずい!!)

くるりとダヤンに背を向けて顔を両手でパタパタと扇ぎ集まった熱を必死で逃がす。

「?…フィーナ殿？」

ダヤンが不思議そうに声をかけてくる。

「あ、何でもありません！ちょっと暑いなあって！あはは!!」

今の会話のどこに暑くなる要素があったのか問われたら苦しい状況だけど、正直に言えるわけないし。

それにしても、同じく竜の加護を受ける二大国のことなのに受け継いでいる力と体の事、なにも知らなかったな。確かにグランディアの人たちにとっては変わった事でもないんだろうし、わざわざ公にする必要もないんだろうけど、これはもう少し勉強すべきだわ。

嘘か本当か、グランディアに行くというお話も出ているみたいだし勉強するに越した事はないよね。

よしつと心の中で気合をいれたと同時に後ろから何か温かいものに抱きつかれた。

「きゃあ！　　ってセルク、様!？」

「なーに二人仲良くなっちゃってんの？」

「仲良くつて…ちょっとお話しただけですよ。セルク、様こそご用時は済んだんですか？先ほど書き物されてましたよね。」

「ああ、屋敷に入ってから状況を書いて城に送っただけだ。…それより。」

「なん、ですか？」

セルクは後ろから抱きついたまま言葉を切る。

それよりなにより離して欲しいんですけど！？

せつかく冷めかけた熱がぶり返すじゃない！

「敬語が戻ってるぞ。しかも微妙にセルク”様”って取ってつけたように敬称つけるなよ。」

…そういえば…。

だって二人きりの時と違って従者であるダヤンがいるから、不敬に思われるかと思って。

ちらり窺うようにダヤンを見ると察してくれたのか「ああ」と頷いて白い歯と笑顔を見せる。

「セルク王子が良いと言っているのなら、俺の前でも敬語と敬称は不要だ。もちろん俺と話す時もな。というわけで、いい加減離してあげたらいかがですかセルク様。」

「はいはい。」

しぶしぶといった感じでセルクが離れていくのを眺めながらダヤンは口を開いた。

「先ほどセルク様には報告したが、この屋敷の裏にある実験棟に

ミランとその部下、そして数人の珠巫女と思われる少女がいて、フィーナから取り上げた木箱を爆薬で開けようと試みている。だが開かない為、フィーナを連れてくるよう命令された。箱の開け方を知っているのか？」

「知ってるというか、あれを開ける鍵が第一神殿にあるということしか知らないわ。」

「それだけ知ってれば十分だな。フィーナを使って取りに行かせるという手もある。あの珠巫女である少女達を人質に捕られれば従わざるを得ないだろう？」

「っ……じゃあ、まずは珠巫女たちを解放しないと……」

やはり想像通り珠巫女を使って種を開花させようとしたんだ。でも思い通りには絶対させないんだから……。

「それと、ミランが直接手をかけた訳ではないが珠巫女の一人が毒草にやられて重症だ。」

「……なんですって!？」

「新種の毒草の毒らしく、ミランも解毒薬をもっていない。珠巫女たちもそれを治せるほどの力は持ってないらしい。」

「さつき送った手紙にその事も書いておいたから、解毒薬もしくは解毒できる珠巫女を連れてきてくれるといいんだがな。」

「……まずは、ミラン卿のところに行きましょう。最優先は箱じゃなくて珠巫女をお願いします。」

「いいのか？」
セルクの問いかけに私は深く頷く。

「未来は箱の中ではなく、少女達の中にあります！行きましょう
！！」

波乱の幕開けとなった花祭り1日目。

すでに陽は昇りきり、頂点を過ぎてラストスパートに入ろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8233o/>

竜の紡ぎ歌

2011年9月8日09時07分発行